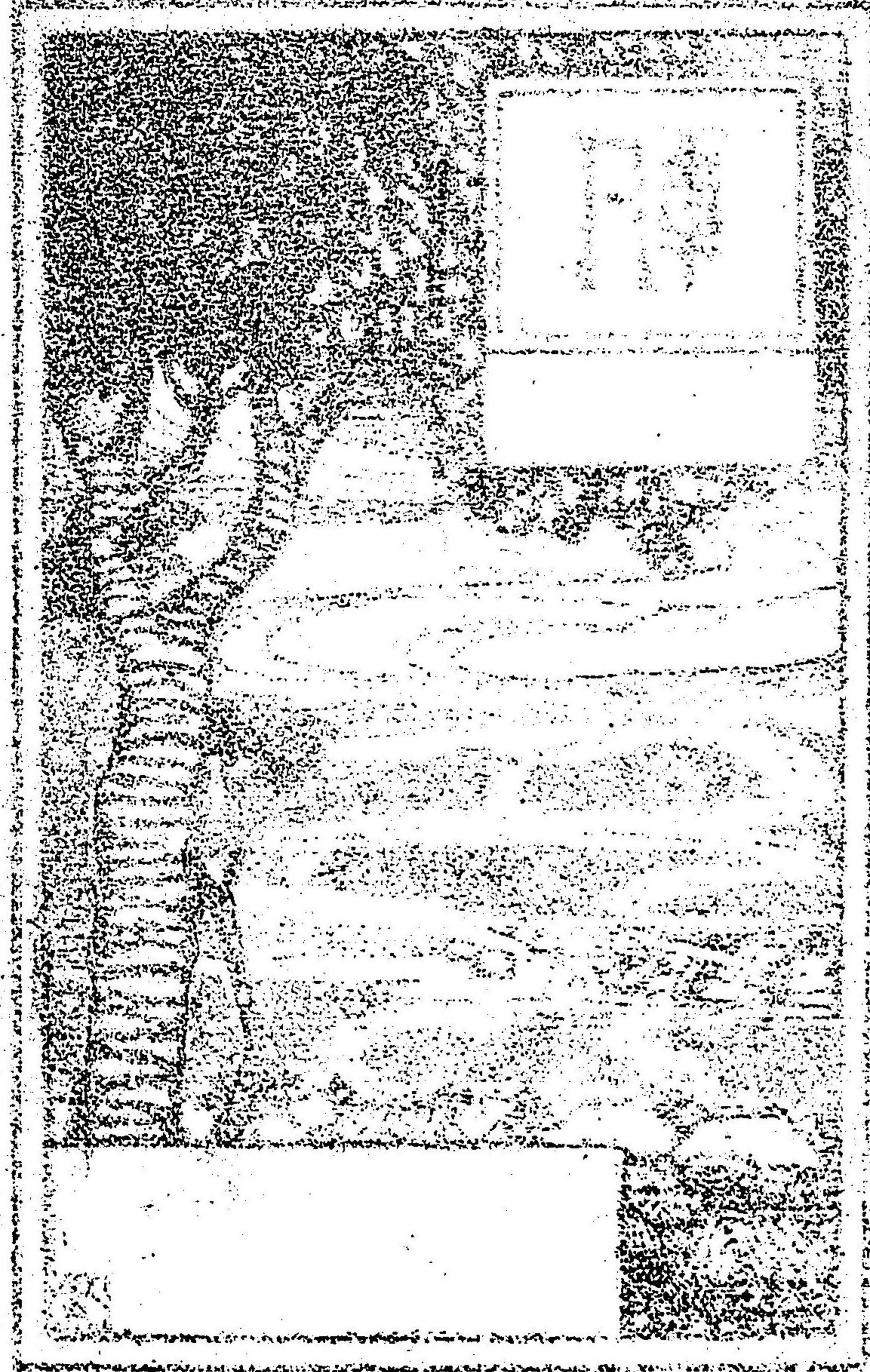


338-92



第 一

1

第 一

著 袋 花 山 田

朝	死	鶏	一 夜	げんげ	手 紙	散 步	飯	別るゝまで	別れてから
一	五	五	五	一〇	一五	一五	一五	二〇	二五

朝

家の中二階は川に臨んで居た。其處にこれから發たうとする一家族が船の準備の出来る間を集つて待つて居た。七月の暑い日影は岸の竹藪に偏つて流るゝ、碧い瀬にキラキラと照つた。

涼しい樹陰に五六艘の和船が集つて碇泊して居るさまが繪のやうに下に見えた。帆を舟一杯にひろげて干して居るものもあれば、陸から一生懸命に荷物を積んで居るものもある。此處等では出来る瓦や木材や米や麥や――

それ等は總て此川を上下する便船で都に運び出されることになつて居た。その向ふには、某町から某町に通ずる縣道の舟橋がかつてゐて、駄馬や荷車の通る處に、橋の板の鳴る音が静かな午前空気に轟いて聞えた。

橋のすぐ下では、船頭が五六人、せつせと竹の筏を組んで居た。

『婆様、小用が出ないか。船に乗つて了うと面倒だからな。』

七十近い禿頭の老爺が傍に小さく坐つて居る六十五六の目のひたと旨ひた老婆にかう言ふと、

『それぢや、面倒でも今一度連れて行つて貰ふかな』

やがて婆さんは爺さんに手を曳かれて徐に長い縁側を厠の方に行つた。

『よくそれでも世話を見なされるな』

これを見て居た六十五六の今一人の老爺は、傍に居た五十二三の主婦に

話しかけた。

主婦は老人や子供の世話に忙殺されて居た。荷積の指圖もしなければならなかつた。送つて来て呉れた人々の相手にもならなければならなかつた。長い間住んだ土地を別れて来るに就いてのいろ／＼の追憶や羈絆もあつた。

『中々おの眞似は出来ませんよ』

かう言つたが、丁度其時今歳十一になる弟の方が川の縁の方に駆けて下りて行くを見附けて、『正や、川の方に行くとは危ないぞ！』

白緋を着てメリンスの帯を緊めた子は、それにも頓着せず、急いで川の下の方に下りて行つた。其處にはもう十六になる兄が先に行つて居た。岸に繋がれた一艘の船には、長い間田舎家の茶の間に据ゑられた長火鉢だの、

茶箆筒だのがそのまゝ積まれてあつた。

『それ、あの船だぜ！』

兄はかう弟に言つた。

『どれや、どの船？』

『それ、火鉢があるぢやないか』

其船の船頭は目腐れの中年の男で、今一人の若い方の船頭は頻りに荷物を運んで居た。髪を束ねた上さんは苦やら帆布やらをせつせと片付けて居た。

一家族は此處から一里ほど離れた昔の城下の士族町から來た。老人夫婦に取つても、主婦に取つても、長年住み馴れた土地や親しい人々に別れて來るのは辛かつた。東京に行つて、知らぬ土地の土になるのは厭だ！かう

目の旨ひた婆さんは言つた。長年苦勞した種に芽が生えて、十分ではなくとも、兎に角子息が月給取になつて、呼んで呉れるのは嬉しいが、東京といふ處は石の上の住居、一晩でも家賃といふものを出さずには寝られない。それよりはどんなあばら屋でも、自分の家で足を長くして寝て居る方が好い。主婦もいざとなつてからかう言ひ出した。しかし月給取になつた子息を一人都に離して置くのも氣がかりであつた。それに修業盛の弟達の爲めもあつた。

親類や知人などは一月も前から、お別れだと言つては、饅頭を打つたり肴を買つたりして、老夫婦や主婦を呼んで御馳走をした。

一人の娘は去年さる機屋に望まれて嫁にやつた。今年の四月頃から懐妊の氣味で、其の前から出るのと言つて居たが、愈々上京の話が決る

と、『私ばかり置いて行くのかえ、母さん』と言つて泣きに来た。母親は、『まア、何うにでもするから、兎に角體が二つになるまで辛抱してお出で』から宥めたり賺したりしたが、今朝發つて来る時にも、町の外れまで送つて来て、大きな腹をして、垣の處に寄りかゝつて泣いて居た。目の旨ひたお婆さんは、車に乗ると眼が眩ると言ふので、昔御國替への時乗つて来たやうな輕尻馬をわざわざ仕立て、町の通をほつくりくと遣つて来た。『盲目でも眼が廻るのかねえ』と誰かが言つた。維新前から船の間屋の爺を知つて居るお爺さんは、朝から禿頭を光らして出かけて行つて居た。

二

船の準備がやがて出来た。

長い踏板が船縁から岸に渡された。一番先に小さい弟が元氣よくそれを渡つて、深い船の中に飛んで下りた。其處まで送つて来た婿の機屋が盲目のお婆さんを負つて續いて渡つた。お爺さん、主婦、それから便船を幸ひに東京まで乗せて行つて貰はうといふ隣のお爺さんも乗つた。

船の中はちやんと整理がしてあつた。暑くないやうに、一ところ苦が蔭いてあつて、其處に長火鉢や茶箆筒が置いてある。炭取には炭が入れられてある。いつでも茶位入れられるやうになつて居た。

酒好きのお爺さんは、徳利に上酒を一升ほど入れて来たが、子供に引くりかへされぬやうにと、それを茶箆筒の隅に押付けて置いた。

『お貞、それは酒だからな……こぼさぬやうにして呉りやれ』

かう主婦に注意もした。

『これさへありや、まア、退屈も凌げますぢや？』

隣のお爺さんとこんなことを言つて笑ひ合つた。

主婦は舅の酒には苦勞を仕抜いて來た。夫の生きて居る間は、酒の上で二人はよく親子喧嘩をした。親類に呼ばれて行く時には、屹度酔つて管を捲いた。夫に別れてからでも、町の居酒屋で泥酔して、使を受けて迎へに行つたことなどもあつた。嫁に來た當座には、何處か酒のない國に行き度いと思つた。母親はよくかう子供等に話して聞かせた。しかし此頃では年を取つてもう大分おとなしくなつた。

盲目のお婆さんは、席が定ると、懷から手拭を出して、それを例のごとく三角にして冠つた。暢氣な鼻唄が陰るやうに聞え出した。

『暢氣なもんだねえ、もう鼻唄が出たよ』

母親は其處に立つて居る次男に小聲で言つた。

岸には送つて來た人々が並んだ。門の前で別れて來た人もあつた。町の入口で別れをつげた人もあつた。町はづれまで來てさらば！を言つて行つた人もあつた。其川の岸まで來たのは最も親しい人達であつた。

次男を送つて來た一人の青年は、其友達のからして東京に出て行くのをさも羨しさらに見送つて居た。

船が動き出した時、盲目のお婆さんを除いては、皆な船縁の處に顔を並べた。岸の人々も別れの言葉を述べた。

船は靜かに流を下つた。

其頃は汽車が今のやうに便利でなかつた。運賃も高かつた。で、この家族はかうして船で東京に行くことになつた。東京から毎日来る小蒸汽は、其頃ペンキ塗の船體を處々の埠頭の夕暮の中に白くくつきりと見せて居た。

老人達に取つては、その經て來た時代の推移ほど急激なものではなかつた。此人達は大小を指して殿様の行列の後に跟いて歩いた。勤王佐幕の喧しい争鬪の時には、晝夜兼行で濱町の上屋敷に上訴に出かけて行つたこともあつた。維新の際には、若者達の出陣した後を守つて、其處此處の番所を固めた。

侍が士族となり、百姓が平民になつて、世の中は目眩しいほどに變つて行つた。實力を持つた百姓町人が世に出て、扶持を失つた士族が零落して行くおはれなるさまをも見た。大名小路の大きな邸が長い年月に段々つぶれて畑になつて行くのをも見た。御殿のあつた城址には徒に草が長じた。隣の老人の家柄は、今移轉して行かうとして居る家族よりは、數等すぐれた家柄であつた。昔ならば槍以上と以下とでは、殆ど交際が出来ぬほど階級が違つて居た。隣の老人は二百石の家柄で暢氣に謠ひをうたつて暮して來た。それに引かへて、一方の老人は賤い處から武藝や文事を磨いて、人が驚くほど立身して、江戸家老のお氣入りに其人ありと知られるほどの勢力のある生活を送つて來た。

しかしこの二軒は昔しから隣同士に親んで居たのではなかつた。子息の

死んだ後の家族を纏めて、家を買つて其處に其の禿頭の老人が移つて來てから、また十年と経たなかつた。

孫達の話を老人達は常によく話し合つた。

『常さんがしつかりして居るから、お宅では仕合ぢや』

かう家柄の方の老人は言つた。

家柄の方の家族も矢張息子に早く死なれて、孫に懸らなければならなかつた。總領は娘で、今年二十二になつて居た。田舎にはめづらしいほどの別品で、足利に行つて居る間に、鹿兒島生れで、其土地の中學校の教師をしてゐた男に見染められて、無理に懇望されて嫁いで行つた。一二度其婿が細君と一緒に、柴垣の奥の古い汚い茅葺家に來て泊つて行つたことなどもあつた。其時近所の評判は大變で、豪い婿さんが出來たなど、噂し合つ

た。婿は綺麗な八字髻を生した立派な男で、丸鬚に赤い手絡をした丈の高い細君とはよく似合つた。隣の次男は其婿が朝早く草の生えた井戸端で、眞鍮の金盥で、眼鏡を外して、頭をザブザブ洗つて居るのを見たこともあつた。

處が一年後に、懐妊した細君を里に預けて、其婿は東京へ出て行つたり歸つて來なかつた。約束した仕送は無論寄さなかつた。後には手紙が附箋を附けたまま戻つて來た。

東京に出かけて行けば、探す手蔓はいくらもある。中にはその居る所を教へて呉れたものもある。しかし出懸けて行く旅費もないほどその家は困つて居た。その美しい娘はもう五月近い腹をして居りながら、亂れた髪をしてせつせと機を織つて居た。其處に丁度隣の一家族の上京——で、頼ん

で、無賃で乗せて行つて貰へるのを喜んだ。

四

「常さんがしつかりして居るから、お宅ぢやもう心配なことはない」
隣の老人はかう主婦に言つた。

「何んなもんですか……苦勞しに東京に行くやうなものかも知れませんが、年寄に子供、力になるのは、常ばかりですから」主婦は鳥渡考へて、
「それも、月給でも澤山取れるものなら好いですけれど……」

「始めからさう言ひ譯には行かないぢや……」笑つて見せて、「けれど、正公も成長くなつたし、定公も學問が出来るから、お貞さん、もう安心なもんぢや。これからは樂が出来る」

「何んなもんですか」

主婦はかう言つた。しかし永年一人で苦勞して來た老人や子供の世話を、東京に行けば、子息と一緒にすることが出来ると思ふと、何となく肩が下りるやうな氣がした。子息と住むといふことも嬉しかつた。

「それにしても、お宅のは……御出になる所は分つて居るのですか」
「大抵は知れて居るのですけれどな……何うも不都合で困るぢやな」
「御心配ですなえ」

かう主婦は同情した。

船頭は竿を弓のやうに張つて、長い船縁を往つたり來たりした。竿を當てる襦袢が處々破れて居た。一竿毎に船は段々と下つて行つた。

此附近には竹藪が多かつた。水量の多い今は巴澗を巻いて流れて居ると

ころもあつた。渡船小屋が荻の深い茂みの中から見えて居たり、帆を満面に孕ませた船が二艘も三艘も連つて上つて來るのが見えたりした。竹藪の鳥渡途絶えた世離れた静かな好い場所を占領して、長い釣竿を二三本も水に落して、暢氣さうに岩魚を釣つて居る鰯の大きい麥稈帽子の人もあつた。

川に臨んで、赤い腰巻を出して、物を洗つて居る女もあつた。

二人の少年は物珍らしいので、下に坐つてなどは居なかつた。紺緋の兄と白緋の弟と二人並んで、ぢり〜と上から照り附ける暑い日影にも頓着せず、餘念なく移り變つて行く川を眺めて居た。

『霍亂にでもなると大變だよ』

主婦は下から首を出して、時々聲をかけて呼んだ。

兄の少年が手帳を出して、何か書きつけてゐると、其傍に、隣の老人は遣つて来て、

『おい、定公、何か出来るか……』かう言つて聞いて見た。手帳には七言絶句の轉結だけが書いてあつた。

道具は大抵菰包にして了つた。膳も大きなのを一筒出してあるばかりであつた。晝飯には皆ながそれを取巻いて食つた。暑い日にも腐らぬやうな乾物だとかから鮭の切身だとかを持つて来て、それを菜にした。

『江戸では、今は松魚の盛ですな』

『在番した時分、――勢の好いあの賣聲を聞いて、窓から皿を出して買って食つた時分のことか思はれますな』

少し酒を呑みながら、老人達はこんなことを言つた。

午後には、主婦は連日の疲勞につかれ果てたといふやうに、平生使ひ馴れた黒柿の煙草の箱を枕にして、手拭を顔にかけて、スヤスヤと晝寐をして居た。筈の間から河風が涼しく吹いて来た。

老人連も少し酔つてやがて寢て了つた。兄の少年が船から下りて来た時には、盲目の婆さんも、鼻唄をやめて横になつて居た。晴れた日影はキラキラと水に反射して今が暑い盛であつた。褌袴をも脱捨てた二人の船頭は、毛の深い胸のあたりから、ダクダク汗を出しながら、竿を弓のやうに張つて、頭より尻を高くして船縁を傳つて行つた。眼の悪い方の船頭は、眼脂を夥しく出して、顔を眞赤にして居た。

涼しい陰をつくつた竹藪などはもうなかつた。

五

夕立が催した来た。

船頭は慌て、苦を背いた。其下に一家族は夕立の凄じく降つて通る間を圈を描いて集つて居た。銀線のやうな雨が水の上に白い珠を躍らしてゐるのを苦の間から少年達は見て居た。

『これで涼しくなつた』

かう老人達が言つた。

夕立の霽れた時には、もう薄暮の色が廣い川の上に蔽ひ懸つて居た。渡良瀬川は思川を入れて、段々大きな利根川の會湊點へと近づいて行つた。風が稍々追手になつたので、船頭は帆を低く張つて、濡れた船尾の處で暢

氣さうに煙草を吸つて居る。其傍では船頭の上さんが、釜に米を入れたのを出して、川から水を汲んで、せつせとそれを炊いて居たが、やがて其處から細い紫の煙が繪のやうに川に靡いた。夕照が赤く水を染めて居た。老人達は薄暗い處で酒を飲んでゐた。主婦は酒癖の悪い爺さんが、やがて段々酔つて来て、言はないでも好いことを隣の老人に言ひ懸けてゐるのを聞いた。

隣の老人は何の準備もして来なかつた。酒も飯も黙つて御馳走になつて居た。それも困つて居るからだと思つて居たらしかつた。

爺さんもそれを餘り蟲が好過ぎると思つて居たらしかつた。

『お爺さん、あんなことを言はなけりや好いのに——折角、心地よく連れて来てやつたのに』

隣の老人が舳先の方に行つた跡で、主婦は老爺に小聲で言つた。

『何アに、少し位言つてやる方が好い。餘り蟲が好過ぎる』

かう言つた爺さんは、もうかなり酔つて居た。

『だつて困つて居るんだから』

『困つて居たつて、餘りだ。瓢箪の一つ位持つて来たつて誰も悪いッて言はない……何もおれだつて、そんなことを喧しく言ふぢやないけれどな……』

・義理と言ふものがあらア』

其處に下りて来た兄の少年は、またお爺さんの癖が始まつたなと思つた。螢が一つ闇の中に流れる頃には、船はもう廣い廣い利根川に出て居た。

星の光に水の流るゝのが暗く綾をなして見えた。艇の音が水を渡つて聞えた。

遠い河岸には、灯が處々に點いて居るのが見えた。

其頃、栗橋の鐵橋が出来たばかりであつた。町からわざわざ其橋を見に行つたものも尠くなかつた。其時は一家族の人々の耳にも聞えた。

『それ見ろよ、あれが栗橋の鐵橋だ』

かう主婦が二人の少年に指して見せた。川を跨いだ大きな鐵橋は暗い夜の闇の中に其輪郭をはつきりと描いて居た。珍らしいものにわくがれて居る兄弟の心は躍らざるを得なかつた。

やがて船は近づいて行つた。橋杣に當る水音は高く聞えた。少年も老爺も主婦も其下を通る時、皆仰向いて、その大きな鐵橋を間に透して見た。兄弟は手を延してその橋杣を叩いて通つた。

六

兄弟の心は東京に憧れ切つて居た。

中でも兄は、これで多年の志が遂げられたやうな氣がした。東京に行きさへすれば、どんな目的でも達せられる。何んな豪い人にもなれる。

馬車に乗るやうな立派な人にもなれる。其處には、かれの爲めに、あらゆる好運と幸福とが門を開いて待つて居るやうにすら思はれた。

其處には何んな物がかれ等を待つて居るかを知らなかつた。

川は暗かつた。岸の灯が明るく處々に點いて居た。誰か大きな聲を立て、土手の上を通つて行つた。

艦の音が絶えず響く。

船の中にも蚊が居るので、主婦は準備して来た蚊帳を苫の角に引懸けて低く吊つて、其處に一緒にゴタゴタに頭やら足やらを入れて寝た。棚の上の三分の洋燈は、薄暗く青い蚊帳を照して居た。涼しい河風がをりをり吹いて通つた。

兄の方の少年は、蚊帳の中に入つても、容易に眠られなかつた。眼が冴えて仕方がなかつた。かれは船を漕いで居る船頭の船尾の處に行つて、黙つて暗い水を眺めて立つた。

一人の船頭は、マッチを闇に摺つて、大きな煙管に火をつけて、スバリスバリ遣つて居た。時々笠の中の明るく見える船や、箒のやうに火を焼いて居る船などがあつた。

朝、人々が眼を覺した時には、船はある小さな埠頭に留つて居た。朝霧

の晴れ間から、青い蚊帳を吊つた岸の二階屋の間が見えたり、女が水に臨んで物を洗つて居るのが眺められたりした。其處に泊つて居る船も五六艘はあつた。朝炊の煙が紫に細く廻つた。

『朝の氣持は好いなア……何うだ定公』
かう隣の老人は其處に立つて朝の川を眺て居る兄の方の少年に言つた。

お爺さんは、

『朝酒といふものは旨いものだ』

こんなことを言つて、朝飯の時盃を隣の老人にさした。隣の老人は二度辭つて見たが、それでも後では四五杯受けて飲んだ。

隣の老人は、財布にくらの金をも持つて居なかつた。只で乗せて伴れて行つて貰へるからこそ出て来たほどの貧しい身には、世話になるは氣の

毒だとは思ふが、しかし酒を買ふほどの餘裕はなかつた。船に賣りに来る大福を買つて、それを弟の少年や盲目のお婆さんに分けて遣る位の義理が關の山であつた。孫達の話が出て、上京する一家族の希望に満ちた有様とは比ぶべくもなかつた。隣の老人はいつも小さくなつて居た。他人の世話になる辛さをもつくづく感じた。

『常さんがしつかりして居るから、本當に仕合だ』

いつもかう言つて調子を合せた。

汽船で行けば一日で到着するほどの行程だが、和船では中々さう早くは行かなかつた。暑いと言つては休み、眠らなければならぬと言つては碇泊し、荷の積替をすると言つては、岸の小さい埠頭に綱を繋いだ。荷の種類に由つては、二時間近くも其岸を離れることが出来ないこともあつた。

其時は『かう手間を取つては仕方はない、これではとても今日東京には入れない。此方はまア、船の中で、一晩位餘計に寝るのは好いとしても、常が遅いつて待つてゐるだらう』から主婦もお爺さんも一方ならず氣を揉んだ。お爺さんは、わざと聲を猫撫聲にして、『船頭さん、もう出してもいい時分だね』など、聲をかけた。

ある淺瀬では、餘り暑いので、船頭が裸で水の中を泳いで居ると、船縁で見て居た弟の方の少年は、堪らなくなつたといふやうに衣物を脱いで、ザンブと水の中に飛び込んだ。『大丈夫ですよ、私等がついて居るから』船頭はかう言つて心配する主婦の方を見て言つた。

連日の快晴で、水の淺くなつた處などもをり／＼あつた。上りの小蒸汽が白いペンキ塗の船體を暑い日影にキラキラさせて、淺瀬につかへて居る

傍をも通つて行つた。汽船では乗客を皆な別の船に移して、荷を軽くして船員總が、りで、長い棹を五本も六本も浅い洲に突張つて居た。しかも汽船は容易に動かなかつた。煙突からは白い薄い煙が徒らに立つて居た。

其日も暑い日であつた。それに風がなかつた。上りも下りも帆を揚げて居る船は一隻もなかつた。一人の船頭の胸からは油汗が流れ、一人の船頭の眼からは眼脂が流れた。人々は岸の人家や土手の樹木の移つて行くことの遅いのに段々倦んで来た。それにチリチリと上から照り附けられる苦の中も暑かつた。盲目の婆さんは、福祥一つになつて、濡して絞つて貰つた手拭を、皺の深い胸の處に當て、居た。

川に臨んで白聖造の土蔵の見える處に來たのは、其日の午後であつた。此處には有名な白味淋の間屋があつた。酒も灘酒に匹敵するやうなのが出

來た。もう持つて來た酒を大抵飲み盡した爺さんは、「船頭さん、其處に行つたら鳥渡寄せて下さいよ」餘程前からかう言つて其岸に來るのを待つて居た。

『此處の白味淋はそれや旨いな』
船頭達もかう語り合つた。

『買つて來て上げやしやうか』と一人の船頭が言ふのを、「何に、私が買つて來る、他に用もある」かう言つて斷つた爺さんは、途中で船頭に飲まれるのをひそかに恐れて居た。爺さんは徳利を下げて、禿頭を日に光らせながら踏板を傳つて行つた。

徒歩で行けば其處から東京まで三里位しかないといふ河岸に来て、船頭はまた船を繋いだ。とても今日は東京に入ることは出来ないから、暑い中を此處で休んで涼しくなつてから出懸けやうといふ船頭の腹であつた。船に倦きた人々は皆な不平を言つたが、しかし眞夜半に東京に着いても仕方がなかつた。止むなく此處で待つことにした。

と、隣の老人は、

『甚だ失禮ぢやが……まだ口が高いし、それに今日東京に入つて置く、都合が好いから私は此處で失禮して歩いて行かうと思ふんぢやが……』
かう言ひ出した。世話になるのも氣に懸れば、爺さんから酔つてチクチク言はれるも辛かつた。

誰も引留めはしなかつたが、しかし餘り好い心地もしなかつた。

『定公、また東京で逢はうな』

持つて来た風呂敷包を背負つて、古びた編蝠傘を持つて、すり減した朴齒の下駄を穿いて、しよぼたれた風をして、隣の老人は暇を告て行つた。土手の上には枝を張つた大きな橡の樹があつて、其傍の葭藪には、午後四時過ぎの日影が照つて居た。兄の少年は其の隣の老人がとぼくと土手に登つて行くのを見えなくなるまで見送つて居た。

『もう歩いて行かれるからッて、此處まで連れて来て貰つて、餘り勝手過ぎるのさ——』主婦はかう言つた。

『碌に錢を持たねえで、人の借りた船で、飯も酒も食つたり飲んだりして此處で下りるッて、好く言へたもんだ』爺さんもこんなことを言つた。

涼しくなつた頃から、船頭は船を漕ぎ出した。もう海はさして遠くなかつた。岸には芦荻や藻が繁つて、夕日が汀を赤く染めた。

それに幸に追手の夕風が吹いた。船頭は帆を揚げて、楫をギイと鳴らして、暢氣に煙草をふかした。誰の心も船のやうに早く東京に向つて馳せて居た。

古戦場だといふ高い崖の下を通る頃には、もう夕暮の薄暗い色が、廣い川一面に蔽ひかゝつた。

東京に入つて行く堀割は、それから一里ほど下つた處にあつた。それは川口といふところで、和船で交通をする時分には、随分繁華な船着であつ

た。かなり聞えた料理屋も二三軒はあつた。其處では田舎にめづらしい海の魚が食へた。赤い帯を締めて戯談を言ふ女も大勢居た。藩の好い家柄の子息で女房子がありながら、此處でさういふ女に溺れて評判に立てられたこともあつた。其頃東京に出る人は、「川口に行けば、ひき身汁が食へる」かう言つて誰も楽しみにして來た。

しかし今ではわざと寄つて食事をして行くものもなかつた。料理屋も段々つぶれたつて、一番下等なのが唯一軒残つた。爺さんは此家の爺婆に昔から懇意であつた。一家族の人々は船から上つて、暗いランプのついた狭い汚い間で、兼ねて噂に聞いて居る生魚とひきみ汁とを食つた。

兄の少年の眼には曾て榮えたところとは何うしても見えなかつた。闇の田圃の中に、五六軒茅葺家があつて、其處から灯が唯ちらちら見え

此處でも、船頭は矢張容易に船を出さなかつた。待ちかねて爺さんが其所在を尋ねに行つた。やがて『酒を飲んで酔ばらつてゐるやがる』かう言つて歸つて來た。

船が出た頃には、遅く出た月がもう高くなつて居た。狭い堀割の兩側には種々な樹が繁つて、それが月の光を篩して、美しい閃きを水に投げた。夜はしんとして居た。ところ／＼にかゝつてゐる船の苦の中からは灯が見えた。犬の吠える聲が四邊に響いて高く聞えた。

夏の夜は明易かつた。兩側に人家が續いたり、橋が架つたりするあたりに來る頃には、もう全く明放れて居た。

小さい艦を軽く操つて、物を賣つて行く舟もあつた。

『そら、見るよ……あゝやつて、東京では朝早くあざりを賣つて歩くんだ

ぞ』

母親は兄の少年に指して見せた。

『もう、此處は東京かえ？』

弟がかう訊くと、

『東京ともよ。深川ツて言ふ處だぞよ』

少年達の眼には見ゆるものが皆なめづらしかつた。白壁の土蔵、ブリキの屋根―河の岸には綺麗な路があつて、其處を人がチラホラ歩いて居た。

たぶたぶとさして來る朝の潮、高く架けられた給のやうな橋、綺麗な衣服を着て其上を通つて行く女、ぶつつかりはしないかと思はれるほど近く掠めて行く多くの舟、大河の碧に捺したやうに白く見える小さい汽船―漸く起つて來る雜然とした朝の物の響は、二人の少年の前に忙しい都會を

死

朝

展^{ひろ}げて見^みせた。

三

整次が起きた時には、風雨が凄しく闇に荒れて居た。

『ひどいしけだね』

から聲をかけながら、かれは流し元の方に歩いて行つた。乳を搾る男はもう一時間も前に起きて、ボンヤリした洋燈の光の下で、大きなバケツを牝牛の乳房に當て、居た。乳房からは乳が流れるやうに落ちた。

整次は今一度聲をかけやうと思つたが、平生無口な男なのを知つて居るので、其儘黙つて自分の仕事に取懸つた。しぼつた牛乳を大きなバケツから更らに幾つかの小さな鐘に分けて、それを運搬車に載せて、毎朝得意先

死

に配達して行くのがかれの役目であつた。

整次は此處に来て、もう一年ほど同じやうな労働を續けて居た。かうした青年にはめづらしいほど堅い男で、女郎買に行くではなし、買食ひをするではなし、近所の婢達にからかつて見るではなし、毎月貰ふ幾何の給金は、ちやんと郵便局に持つて行つて、それが好加減の高になると、さまつて故郷の一人の母親の許に爲替にして送つて遣つた。

『整次さんのやうにしても詰らないねえ』若い上さんはいつもかう言つて笑つた。

風雨は今が絶頂かと思はれるほどに烈しく凄じく荒れ廻つて居た。向ふの家の周囲の樺の樹は、潮のやうに鳴つて、物のへし折れる音や、垣の倒れるやうな響が其中に交つて聞えた。ドシャブリに降つて居る雨の音もそ

れと解らないほど強く強く風が吹いた。今一吹き烈しく吹いたなら、屋根も、家も、樹も、すつかり吹飛ばされて了うかとさへ思はれた。

整次は大きなバケツから小さな鍬に牛乳を移しながら、をり／＼手を留めては、屋上を吹き荒る、風雨の音に耳を傾けた。しかし別段それが氣になつて居るのでもなかつた。心は寧ろ故郷の母の許に飛んで行つて居た。

今一月ばかりすると、かれは國に歸ることになつて居た。國では、貯めた金で、小商賣をすることに決めてあつた。昨日もかれは不用な衣服を小包で國に送りかへした。

子供の時分泳いで遊んだ川や、涼しい樹の陰や、母の笑顔などが風雨の凄じい音に連れ合つて、かれの眼の前を通り過ぎた。しかし丈夫さうな腕と體とは、絶えず無心に動いて居た。乳を搾る男の許から運んで來た大き

なバケツも、段々空になつて行つた。

郊外の小さな牛舎では、婢も置いてなかつた。若い肥つた壯健な上さんが、櫛がけでいつも甲斐々々しく勝手元を働いた。

上さんの起きた時には、それでももう餘程風雨が晴れ氣味になつて居た。夏の曉はそろ／＼明け始めて、戸の隙間からは、黍明の光が明るく見えて居た。モウモウと牛の鳴く聲が聞えた。

勝手元に入つて行つた上さんの口から、「まア大變！」と言ふ聲が聞えたので、整次は急いで走つて行つて見た。板葺の屋根が半分めくられて、自然に明いた引窓からは、板片や木の葉や木の枝が其處等一面に足の踏所のないほどに散ばつて居た。竈も鍋釜も板の間も全く雨に濡れて居た。

『これぢや御飯も何も焚けやしない！』

上さんはこんなことを言つて、呆れたやうに棒立に其處に立つて居たが、それでも飯を焚かずには置かれないので、整次があたりを片附けるのを待つて、引窓を閉めて、竈の下に火を燃き附け始めた。しかしぬれた竈は容易に火が燃えつかなかつた。煙が渦のやうに勝手に充ちた。

整次は鐘の入れ替への方を済まして、今度は表の戸を明けた。もう夜はすつかり明けはなれて居た。前の邸の建仁寺垣が見事に將葉倒になつて居たり、空地の大きな栗の樹が根こしになつて倒れて居たりするのを見た。かれは今更に風雨の烈しかつたのに眼を睜つた。しかし幸ひにも空はいつの間にか拭つたやうに晴れてゐた。びしよぬれに濡れて車を曳いて行かなければならないと思つてウンザリした先程の考へも、これですつかり打消

されて了つた。かれは何とも言ひやうのない生々した愉快な心持になつて勢よくいつもの處から運搬車を引出した。

『好い天氣になりましたぜ！』

勝手元の傍を通る時、かれは上さんに向つてさも心持好さうに聲をかけた。五升入、八升入、一斗入などの鍬を六箇ほどかれは運搬車の中に積み入れた。草鞋の新しいのを一足出して来て、帳場の上り端に腰をかけてそれを素足の上に穿いて、穿き加減を試めす爲めに、二三度土の上を力強く踏んで見た。『これで大丈夫』かう口の中に言つて、今度は車の方に行つた。

其時、奥から上さんの聲がした。『整さん、御飯が出来たよ』

で、勝手元に行つて見ると、七輪にかけた鍋からは湯気が白くわがつて

味噌汁の香ばしい臭が朝の食欲を誘ふやうに匂つて来た。かれはいつものやうに、膳と椀と箸とを出して来て、其處に腰をかけながら、傍に置いてゐる大きな飯櫃から飯を盛つて食つた。

『随分ひどい嵐だつたね』

『本當に……一時は家が飛ぶかと思ひました』

『別に何處も何うもならなかつたかね、家では？』

『其處の屋根だけで、外には何うもなつてゐないやうです。前の栗の樹は倒れて了つたですよ』

『さうかね、あの栗の樹が……』かう言つて上さんは驚いたやうに眼を睜つて、

『ぢや、餘程大きな嵐だつたんだね？』

「整次は體を延して、鍋から二杯目の味噌汁を盛りながら『まア、こんな嵐は珍らしい。…損害が随分多かつたでせう。』」

『一體、いつ頃からひどくなつたんだえ？』

『十二時半ごろからです。一時、二時頃が一番ひどかつたやうでした。私
が起きてからも、家が持つて行かれやしないかと思ふやうな時が二三度
ありました』

『でも晴れてよかつたねえ』

『え、本當に…氣分が清々した』

飯を食つて了ふと、整次は、

『ぢや、お上さん、行つて來ます』

かう元氣よく言つて、運搬車の處に行つた。ガラガラと威勢よく駛つて

行く車の音が後に聞えた。

もう朝日が前の樺の森の中に紅く昇つて居た。空は霽したやうに碧く晴
れて、嵐の名残の淡い雲が吹切られて綿の様に早く早く飛んで行つた。

樹の梢には風がまだ音を立て、居た。

垣は其處此處に倒れて居た。檜の樹の並んで倒れて居る處などもあつた。

この春時分、よく牛乳を配達した邸では、裏門が半倒れて、いつもは見え
ない井戸だの、外流しだの、硝子の箱つた勝手口だのが見えた。其處に使
はれて居た婢は、年は十八で、色は黒いが、小づくりな、烏渡愛嬌のある
可愛い娘であつた。その婢は子供を伴れて、よく牛モウモウを見せに遣つ
て來た。紅いメリンスの帯や、島田に結つた後姿や中形の派手な單衣など

がいつも整次の眼に附いて居た。

倒れかけた門を避けて通らうとして、ふと其處に其の婢が襷がけになつて水を汲んで居るのを整次は見た。

『お早よう！』

かうかれは聲を懸けて通つた。

一夜暴れた風雨の跡は其處にも此處にも見えた。豪雨に洗はれた道路には、石が出て居て、それが車の轍にさしつて鳴つた。ある家の小屋は、誰れか力のある人でもそつと持つて来てそつと其處に置いて行つたといふやうに、道路の真中に幅をして吹飛ばされて居た。

荒物屋の前では、若い上さんが眠むさうな眼をして、前の戸を明けて居

た。路の角では、近所の工場に出勤する労働者の群が、ガヤガヤと何事をか語り合ひながら通つて行つた。

此方の屋敷町から向ふの屋敷町に行く間には、緩い長い坂が電信柱に縁取られて、ずつと遠くついでゐた。坂の下の低地は、またところどころ空地になつて居て、其處からは左に續く平地から向の丘に連る竹藪やら、新建の家屋やらが晴れた碧の空にレリーフでも見るやうに見えてゐた。高い處を渡る電車の音がはつきり耳に立つて聞えて來た。

晴れた広い地平線を見た整次の胸には、愉快な、生々とした、生効のあつたやうな心が脈々として波を打て居た。若くつて壯健なかれに取つては、今の艱難な生活などは何うでもないやうにすら思はれた。かれの體には元気が充ちてゐた。

法被に半股引を着けた整次の姿は、朝の晴れた空の中、鮮かな輪廓を見せて、長い坂を勇ましく向うへと走つて行つた。坂を下てまた上ると、同じやうな屋敷町がつづいて、やがて御料地の藪に突當つた。

それについて、猶曲つて行くと、栗と樺の疎らな林があつて、片側には芝草の塙だの、大きな門だの、建仁寺垣だのが並んで續いた。一方の藪地には、葎だの萱だの薄だの、中に露草が交つて咲いて居た。かねて見知つてゐる近所の牛舎の配達が向うから遣つて來た。

『お早よう』

『お早よう』

かう挨拶を取交したが、配達の方は振り返つて、『其處に電燈線が切れて居るから注意して行き給へ』

『難有う』

かう言つたが、かれは別にそれを氣に留めやうともしなかつた。

其處からはまた御料地になつてゐた。一番外づれの坂の上の家は、大きな門構の新らしい二階屋であつた。硝子戸が立派に取廻してあつて、形のない庭の松が、垣の上に二本横になつて倒れて居た。朝日はなやかに硝子戸に照つた。

其門の前に、鞆を肩にかけた小學校の生徒が二三人、何かガヤガヤ言つて集つて騒いで居た。見ると、成程其處に、昨夜の風雨に断たれた電燈線が、蛇でもものたくつたやうにだらりと長く地上に垂れて居た。

その断れた處からは、薄い煙が出てプスプスしてゐた。

『危いぞ、危いぞー』

こんなことを言ひながら、整次は其處を通らうとした。

しかし路はその断たれた電燈線にさまたげられて、自由に通行が出来なくなつて居た。暫く躊躇して立つて見て居たかれは、生徒の中に蝙蝠傘を持つて居るものがあるのを認めて、『おい、それを借せ』かう言つてそれを取つて、何の危険をも感じないかのやうに——邪魔物を除いて通つて行くのに何の遠慮もないといふやうに、いきなりそれを傍に拂ひ退けやうとした。それは唯瞬間であつた。アツといふ聲と共に、かれは電氣に觸れて仰向けに倒れた……。

一人の同僚が私に言った。

「貴方の宅では鶏を召上りませんか、召上るなら、其中一羽持つて行きませうか」

同僚の家では、かへした鶏が雄ばかりなので持餘して居た。「雄でも此方で買ふとなると、中々高いことを言ひますけれど、買ふとなると、つぶしの値なんですから」

私は好んで鶏を食ふとは言はなかつた。またこれまでも自分で緊めて食つたことなどもなかつた。私は同僚と養鶏の話や鶏の種類の話や鶏卵

の話などをしながら、いつもの路の角に来て別れた。
私は其時さり其話を忘れて居た。

處が、ある日の夕暮に、玄關に訪ねて来た人があつた。丁度細君も娘も外出して居なかつたので、私が出て見ると、同僚は鶏冠の大きい一羽の雄鶏を抱へて莞爾しながら立つて居た。

『やあ……、まあ上り給へ』

『いゝえ、今日はこんなものを持つて来ましたから、またいづれ……』かう言つて、『却つて御迷惑でしたかも知れません。けれど肥えてますから、食べちや旨いかも知れません』

で、肥つた、鶏冠の見事な、鳥のやうに黒い羽をした雄鶏を私に渡した。雄鶏は飛ばうとして羽搏をしたが、私が腹の處を旋りと兩手で押したので、

其儘コケコケと聲を立て、鳴いた。

暫くして、婢は歸つて来たが、建仁寺垣を取廻した庭の中に、見馴れない雄鶏が一羽、さびしさうに餌をむさつて居るのを見て、『鶏が居ますのねえ』と言ひながら入つて来た。

『お前、鶏をひねつたことがあるかえ？』

私がかう言つて訊くと、

『うゝえ……』

『でもお前、鶏の世話をしたことがあるッて言ふぢやないか』

『えゝ世話はしましたけれど……』

と笑つて居る。

『こんなものを貰つて、却つて仕末に困つて了つた。……ぢや、お前、拵

へることを知つてゐるかえ』

『え、拵へりや出来なひことはない。ですけれど…』
『ひねるだけなら、己がひねつて遣るがなア』

こんなことを私達は話し合つた。鳥屋へ持つて行つて解して貰へば譯はないけれど、それも鳥渡億劫だし、さうかと言つてかうして放つて置く譯にも行かず、いつそ地主にでも遣らうかなど、も言つて見た。

婢は私の家に来る前、田舎の親の家で、十一二の頃から澤山の鶏の世話をした。冬の寒い朝などは雛兒の出し入れをして遣るのが随分大變であつた。婢の後を雛兒は常にぞろぞろと跟いて歩いた。ある時などは雛兒を知らずに一羽踏つふして、母親に烈しく叱られたこともあつた。それは鶏は育て、見れば可愛いものですけれど…世話が焼けて…面倒で」前にも

こんな話を婢はしたことがある。

其處に子供達が歸つて来た。

『ヤア、鶏が居らア』

『父さん、何うしたの？ 家の、此鶏？』

總領の娘の兒は、

『父さん、此鶏、鶏卵産むの？』

かう言つて、皆なめづらしがつた。七歳になる男の兒は、鶏が庭の隅に行つて草の葉を啄いたり、頭を傾けて何か物を考へるやうな風をしたりするを傍離れず飽かずに見て居た。『ヤア、鶏が糞をひつた！』やがてこんなことを言つた。

娘の兒は、

『父さん、この鶏、家に飼うの？……え、殺して食つて了ふの？ 可哀相だわ。お止しなさいよ、殺して了ふのは。飼つて置けば、鶏卵を産むぢやないの、……田川さんなど、それは澤山居て、毎日鶏卵を五箇も六箇も産んでよ。得だわ、鶏は鶏卵を産むから』

やがて歸つて来た妻も、それを聞いて、すぐ庭の縁側に出て見て、『好い鶏ね、飼へれば飼つて置く方が好いけれど』かう言つて、座敷に入つて来て、其處らに散ばしてある衣服を疊んだ。

私達夫婦は生物に就いて餘り多くの好みを持つて居なかつた。猫も犬も見ると厭だといふのが妻の平生の態度である。それに、子供の世話だけでも手が廻り兼ねると云ふやうな私の生活では、婢にしても、此上鶏の世話までさせるのも氣の毒であつた。

『誰も世話が出来なければ、ひねつて了ふさ！』
私がかう言つた。

けれど翌日になつても、その雄鶏は矢張垣の中の庭でさびしさうに遊んで居た。昨夜は婢が日が暮れてもう眼が見えなくなつた時分に物置の中に抱いて入れて遣つた。今朝は其の勇ましい鳴聲で人々は眼を覺した。

婢はトウトウトウと呼んで挽割麥をまいて遣つた。

其日は午後から雨が降つた。梧桐の葉からはらと雨滴が落ちて、子供の植ゑた鳳仙花が赤く白く濡れて見えた。學校から子供等が歸つて来る時分には、鶏は雨に濡れそぼちて、縁側の傍に小さくなつて居た。

夕飯の時に、『自然にまかせて、少し放つて置いて見るのも好いさ、自分

で殺すのも厭だし、自分が殺さないまでも、地主に遣れば、不用な雄鶏だから、何うせ殺して食はれて了ふんだし、さうかと言つて飼ふ氣にもなれなければ、仕方がないから、此儘にして置くさ。その内何處かに行くだらう。それとも何處かに遣つて来るか』から私は言つた。が、矢張捨て、も置かれなかつた。

二羽位ならそんなに、手數もかゝりはすまい。一羽雌を買はう。とうとう遂にはさういふことになつた。

餘り遠くない處に養鶏場があつた。同僚は「それは一つ聞いて見ませう。飼て下さるんなら、それは嬉しい。好い相手を一見附けて上げませう」から言つて、その養鶏場に話して呉れた。

養鶏場の男はやがて牝鶏を一羽抱へて遣つて來た。それはもう鶏卵を生

んで居る鶏であつた。「何うもお安く御座んせんけれど、もう明日からでも鶏卵を生ひんですから」から言つて一圓五十錢を請求した。

雄鶏は其時表の庭の樹の下の日影のチラチラする處で遊んで居た。股引に腹がけをした養鶏場の男が、牝鶏を抱へて、其處に行つて、「トウトウト言つて、それを地上に放つと、それを見た雄鶏は、コケコケといかにも喜ばしやうな鳴聲を立て、其まゝ、其傍に寄つて行つた。

『牝鶏が來た？ 母さん？』

子供等は大騒ぎをして、其處に飛んで遣つて來て、檜や山茶花の青葉の陰にちつと身を隠すやうにして居る牝鶏を珍らしやうに見た。

からなると、餌も買つてやらなければならなかつた。寝る處も拵へて遣

らなければならなかつた。『お宅は庭がお廣いから、これなら出して置いて
も大夫丈でせう。……寢床は物置の中に、私が明日でも来て造つて上げま
せう。何に譯はありませぬ』養鶏場の男は手軽く受合つて歸つて行つた。
翌日私が社から歸つて来た時には、物置の中の鶏の寢床はもうちやんと
出来て居た。板を七八枚近所の材木屋から買つて来て、それを彼方此方と
打付けて、横木を一本真中に渡して、其處に鶏が上つて寝るやうに拵へて
あつた。妻はまた妻で、めづらしさうに眞白な鶏卵を一個出して見せて、
『これが今日生んだんですよ。綺麗な好い鶏卵ぢやありませんか。今は鶏
卵は高いから、買うと、どうしても四錢はしますよ』かう言つて、今日午
前の十時頃に養鶏場の男の寢宿を造へて居る傍に生んであつたといふこと
を話して聞かせた。

『かうして毎日生んで呉れさへすりや、一圓五十錢位ぢきに元を取かへし
て了ひますねえ、面白いもんですね』妻はにこにこして居た。

『どれ、母さん、見せて？』

總領の娘の兒がかう言つて、その傍に行くと、他の子供達も、『僕にも』

『僕にも見せて』と皆な其處に寄つて来た。

馴れないので、鶏はまだ獨りで寢宿の中に入つて行かなかつた。それを
入れて寝かして遣るのが少くとも婢の一仕事であつた。垣の外に出たのを
漸く門の中に入れるのも容易でなかつた。『だから、私、鶏の世話大嫌ひサ』
こんなことを終には婢も言つた。

何んな風にして居るかと思つて、一度閉めた物置の戸を私が明けて見る
と、それでも横木の上にちやんと留つて、向むきになつた雄鶏と此方を向

いて居る牝鶏とはびつたり體を合せて居た。

緊めて食はれて了ふ運命を持つて来た雄鶏は、今度は自由と勝利を得たかのやうに、牝鶏を連れて、綺麗な鶏冠を朝日に輝しながら庭を歩いた。勇ましく時をつくる聲は四邊に高く響いて聞えた。

コ、コ、と牝鶏が忙しく鳴いた。それは鶏卵を生む時期の近い徴であつた。窠宿の中には四角な箱が入れられてあつた。牝鶏はやがて其處に入つて、蹲踞つて、可愛い小さい眼をかゝやかに居た。コ、コ、と絶えず鳴いて居た。

子供達はそれをめづらしがつて、學校の遅くなるのも知らずに見て居る朝などもあつた。日曜日には、子供達の顔が三つ其處に並んだ。「何うしたんでせうねえ。いつまでも生ないのねえ。」總領の娘の兒は終には倦きて、

丁度其處に誘ひに来た女の兒と戶外に遊びに行つて了つた。やがてコ、ココケツコといふ聲が聞えたと思ふと、向ふの庭で餌を拾つて居た雄鶏は、急いで其處に驅つて来て、矢張ココケツコと聲を立てた。牝鶏の巢から出た跡には白い、綺麗な鶏卵が一箇生み落されてあつた。それを、今まで見て居た男の兒の兄の方が逸早く取つて、座敷で裁縫して居る母親の前に得意さうに持つて行つてつきつけて見せた。

弟の方は「僕に取らせない、僕に取らせない」と言つて聲を擧げて泣いた。

處がある日雄鶏は何處にか行つて居なくなつた。さういふ事は其前にも一二度あつた。一度は前の家の庭にまぐれ込んで居た。一度は一町ほど隔

つた大きな家の養鶏場の金網の窠宿の外に行つて居つたのを、其家の爺が連れて来て呉れた。『何うしたツて、ちやんと入れて置く金網を拵へて置かなくては駄目ですよ。何處の家だツて拵へて置くんですもの』かういふ婢の言葉の陰には、『生物だから、何處に行くか解りやしない』といふ意味が含んで居た。婢に取つても、何處に行つたか解らないものを、彼方此方と探して歩くのは大抵ではなかつた。

最後の時は午後の三時頃から其姿が見えなかつた。犬に逐はれたかのやうに、コケツコオ、コケツコオと常に無い鳴聲を立てたのを妻は聞いて知つて居た。外から歸つて来た男の兒は、先程向ふの家の垣の處で家の雄鶏が遊んで居るのを見たと言つた。私は社から歸つて来ると其儘、彼方此方を探して歩いた。しかし何處にも居なかつた。遠くまで探しに行つた婢も

手を空うして歸つて来た。

『忙しいたツて何だツて、注意して見て居なくつては仕方がないぢやないか。犬に逐はれたと思つた時、出て見なかつたお前も悪い。生物だから仕方がないツて言つたツて、それは申譯にも何にもなりやしない。』

こんなことを私は言つた。しかし何の甲斐もなかつた。

私はそれでも其中何處からか伴れて来て呉れるだらうといふやうな微かな期待を持つて居た。緊めて食つて了ふ人もまさかにあるまい。また黙つて留めて自分の家に伺つて置くやうなものもないだらう。私はかう思つて見た。私は人の家の鶏を盗んで商賣にして歩く男のあることなどは知らなかつた。

勇ましい鳴聲の無い朝はさびしかつた。雨が蕭々と降つてゐた。今度は

しつかりと木戸を閉めた庭を牝鶏がさびしさうに餌を拾つて歩いて居るのを見るとき、私の胸には何となく可哀さうなやうな怪しいやうな心地が起つた。子供等も元氣の無いやうな顔をして居た。

『何處に行つたんでせうねえ、本當に家の雄鶏は？』
總領の女の兒は庭に居る牝鶏を見てかう言つた。
一日経つた。

矢張雄鶏は歸つて來なかつた。

『初めから、緊めて食つて了つた方が好かつたんだ。可哀相だなどといふ氣を起したから悪いんだ。』こんなことを言つた私はいろいろなことを考へさせられた。

牝鶏の産んだ鶏卵に妻はめづらしさうに番號をつけて置いた。雄鶏が居

なくなつてからも矢張鶏卵を生んで居るので、數は丁度十一になつて居る。

『何うだ、今一羽雄鶏を買はうか』

私は妻にかう言つて見た。

『さうねえ』

妻も養え切らない返事をした。

『いつそ、しめて、食つて了つて、小屋の窠宿を壊して了はうか』

『さうねえ』

矢張養え切らない返事であつた。

もう初めのやうに簡單に問題を解決して了ふ譯には行かなくなつて居るのを私達は發見した。兎にも角にも窠宿をつくる値と牝鶏一羽の値とを私達は出して居た。

しかし一方ではかういふことに捉はれて居ては際限がないといふ事も考へられた。何羽買つても鶏は皆な居なくなつて了ふかも知れない。皆な逃げて行つて了ふかも知れない。それを拒ぐことは出来ない。金網の立派な窠宿を造れば好いかも知れないが、それとてある程度まで其危険を防ぐだけで、絶対に鶏の自由と利益とを占有することが出来る譯でもない。金網の細い目を破つて逃げて行かないまでも、病氣に罹つて死んで了はないとも限らない。私はこんなことまで考へるほど神経が細くなつて居た。

『鶏一羽でも、世話をするとなると、かう難かしいんだからなア』
 慨嘆するやうに私は言つた。

牝鶏は相變らず佗しさうな風をして、芝草の上を歩いて居た。雄鶏と並んで青い草や紅い花の間を元氣よく遊んで居るのを見ると、一種庭の裝飾

ともなつて心持の好いものだが、一羽ぼつねんとさびしさうにして居るのは餘り好ましいものでもなかつた。それにこの牝鶏は鶏冠も小さく、毛の色も灰色の交つた黒色で、一層見すばらしく私には思はれた。

鶏卵を生み落した時には、相變らず、コケコケと喜ばしさうな聲を立てるが、それを聞いて駢けて来て同じ喜びの聲を立てる雄鶏もなかつた。

鶏卵を産む度に、妻は氣遣はしさうに、『よく産みますねえ、雄が居なくつても……早く一羽何うかしなくつては、鶏卵を産まなくなつて了ひますねえ』

で、今一羽雄鶏を買ふことになつた。

『矢張、金網でしつかりした窠宿を拵へて遣らなくては駄目ですね』同僚

は私の話を聞いて言った。

すぐ言葉をついで、『それに、矢張悪い奴がおりましてね。…金網でも、天井がないと竿の先に肉をつけて、人の居ない時を見すまして、鶏を釣つて行く奴などがあるさうですからね。ひどいことをする奴があるものですよ。それに、悪い犬もありましてね、何うかすると、咬へて行つて了ふことなどがあるさうですよ』

費用がかつても仕方がなかつた。私は鶏の爲めに金網の窠宿をつくつて遣ふことに決心した。しかし、養鶏場では、承知して置きながら、容易にそれを拵へて呉れやうとはしなかつた。勿論其處の家にも手はなかつた。金網も四ツ谷まで行つて豫め注文して置かなければ丈夫な廉いのは得られなかつた。

『私の處でもさうでしたよ。遣へるツて言つて中々遣つて呉れさせませんでした』

同僚はかう言つた。

仕方がないので、その出来るまで、私は二羽の鶏を表庭に入れて置くことにした。其處は建仁寺垣で圍まれてあつた。木戸を閉めて置きさへすれば、何處にも出て行かれないやうになつて居た。犬も入つて來られなかつた。

朝、小屋から出すと、すぐそれを其處に追入れて、夕は眼の見えなくなる頃を相圖に窠宿の中に伴つて來るやうにした。鶏は終日長くヒバの陰や椿の根元などで退屈さうに遊んで居た。

敷石の上には、子供の古い玩具の小さなバケツに水が満されてあつて、

それに鶏は代る／＼来ては嘴を入れた。婢は色の褪せた紺緋に赤い袴を十文字に綾取つて、小脇に大きい罐を抱へて来て、トウトウと呼んで餌を撒いた。

戸袋の側に厚い葉の深く繁つた青木が二三本あつた。日盛などには鶏は大抵其涼しい陰に行つて、さゝやかなる爪音を立て、土を掻いて居たりなどした。時には、戸袋の下の柔かい土を掘つて、其處に半身を埋めるやうにして居ることなどもあつた。午になると、牡鶏は鶏冠を立て、嘴を明けて、コケツコオと勇しい高い聲を立て、時をつくつた。やがて近所の工場の汽笛が鳴つた。

二三日は無事に過ぎた。朝夕の出し入れと鶏卵を生む時の世話の面倒なものと、それ以外には別に變つたこともなかつた。唯、處構はず糞を放つて

歩くのには閉口した。それに、硝子戸を明けて置くと、流石に一とこゝろに倦んで居ると見えて、縁側から、バサバサと人の居ない座敷に上つて来て、一番幼ない兒の涼しい風に吹かれてスヤスヤ眠つて居る傍を通つて、此方の庭から向ふの庭へと通抜けて行つた。

『あれ、母さん、鶏が』

子供達はそれを見てよく聲を立てた。

一週間を過ぎても、養鶏場の男はまた金網の窠宿を拵へて呉れなかつた。毎日生む鶏卵はその中にも段々殖えて、一番新しいのには二十六といふ數字が書いてある。『二十六？ それぢやもう今少しで、一羽の元は取れて了ふねえ』私はこんなことを言つて笑つた。

それにつけても金網の窠宿の出来るのが待たれた。出来たら、牝一羽で

は勿體ないから、少くとも三羽位にはしやうなど、話し合ふことなどもあつた。早く拵へて呉れなければ、出入の植木屋を呼んで造らせやうかなどと言つた。しかし妻は此間途中でその養鶏場の男に逢つた時には「何うも申譯がありません。金網はもう出来ましたから、明日か明後日は乾度行つて拵へて上げます」と言つてゐたといふので、それほどまでしたのを斷わるのも氣の毒と思つて、それを待つことにしてゐた。

ある日の夕暮のことであつた。私は書齋に居た。と、妻が遣つて来て、牝鶏が何處に行つたか見えないといふ。先程子供が開放にした木戸から出て行つて、井戸の側で遊んで居るのを私も見て知つて居た。それで一體何うしたのかと私が聞くと、今少し前、犬に追懸けられてけた、ましい鳴聲を立てたが、其時から居なくなつたとのことであつた。「乾度、其處等に隠

れて居るんでせうがねえ」かう言つて妻は探しに行つた。

婢は勝手元の用事に忙しかつたが、私はそれをもやめて探しに行かせた。馬鹿！ といふやうな苛々した氣が私の胸を衝いて起つた。私も外に出て見た。

不圖コケコケといふ聲が聞えると思ふと、隣の畠から駆けて来る牝鶏の後を追つて、茶色の逞しい一疋の犬が一目散に私の眼の前を通つて行つた。あれと言ふ間に、牝鶏の尻の處に噛み附いて、烈しく鶏の羽搏するのにも頓着せず、しつかりとその獲物を咬へたまゝ、垣根の外へと出て行つて了つた。後から追懸けて行つた私は、唯遠く其の犬の後影を見たばかりであつた。

私は怒ることも笑ふことも出来なかつた。「馬鹿！」と罵つて見たが、そ

一
夜

下 4.10.

朝

れは誰に向つて言つたのか自分にも解らなかつた。
私は残つた一羽の牡鶏を眺めて、暫くの間黙つて庭に立つてゐた。

三

手紙
Lee

1933

昭和八年十月十日
手紙

その夜居間の六疊は灯にかゝやいて居た。主人は淡く酔つて、小聲で唄などをうたつて居た。

箏箏を後に、長火鉢を前にして坐つて居る細君の顔にも、機嫌の好い色があつた。長押に懸けた三味線は、黄く明るい壁を地にして、くつきりと浮出すやうに見えて居た。

「随分變つたものですねえ、貴郎が唄をうたふやうになるとはねえ」
かう言つて細君は笑つた。

……君不見黄河之水自天上来、奔流到海不復回、又不见高堂明鏡

夜一

金

悲白髪、朝如青絲暮如雪……若々しい節をつけた詩吟は、やがて静かに緩かに四邊の空氣に漾つて聞えた。それには昔のことが脈々として思ひ出されるといふやうな調子があつた。

しみじみと聞惚れてゐた細君は、

『久し振りで出ましたね』樂しさに笑つて、

『何だかそれを聞くと、昔に歸つたやうな氣がしますよ』

『木川がこの詩吟が上手で、よく吟じて聞かせたものだ。僕のは、奴から教はつたんだが、どうも節廻しが旨く行かない』深く考へるやうな顔をして『實際さうだ。朝に青絲の如く暮には雪の如しだ。翻転して暮して居る中に、己ももう四十だ。それを教へた木川はとうに暮になつてゐる』

『本當にねえ』

細君は染々と云つた。

忙しい辛い世の中に居ては、二人とも落附いた心持になるやうなことはなかつた。昔を思ひ出して居るやうな暇もなかつた。多忙と不安と疲勞とに、主人はいつも尖つた氣分と不機嫌な顔をしてゐることが多かつた。細君は五人の子供の世話に終日追はれて居た。

『今一つ何か吟じて下さいな。それを聞いてゐると、何だかかう體中がゾクゾクして来るやうな氣がしますから』

緩かな抑揚のある吟聲は再び起つた。絶えては續くやうな微かなところがあるかと思ふと、人の心をグングン引張つて行くやうな烈しい強い處もあつた。昔の人の悲愁は矢張今の人の悲愁であつた。主人は眉を昂げたり體を揺かしたりして熱心に吟じた。

其處に三番目の男の兒が入つて來たが、今迄曾て見たことのない父親の
さまに驚いたといふやうに、眼を丸くして、ちつと其處に棒立に立つて居
た。母親が手招きをすると、其儘傍に來て、おとなしく坐つた。其眼は絶
えず父親の方を見て居た。

詩吟はやがて終つた。

『あゝ、あゝ、私ももうお婆さんになつて了つた』

細君は感慨に堪へないやうにこんなことを言つた。

やがて細君は長押にかけてある三味線をおろして、鑓金の袋を取つて、
撥を出して、コマをはめた。ポツンポツンと絲の音がした。細君は笑ひな
がら、いつもの「五所車」を弾きにかゝると、
『それよりは琴を弾かないか』

『琴？』

不思議な要求と言ふやうな顔をして、三味線の手を留めた細君は『でも
もう長く弾かないから、絲が駄目になつてゐるかも知れませんが』

『なのに、大丈夫だよ』

『でも、久しく弾きませんからねえ』

『まア、好いから出して來て御覽』

細君は立つて行つた。

嫁いて來る時細君の持つて來た琴は、萌黄の更紗の袋に包まれて、上下
を赤い紐で結ばれて、久しい間、書齋の床の間に立てかけられてあつた。
何年にも出して弾いて見たことはなかつた。移轉をする時には、いつも荷
厄介にされた。『こんな邪魔なものはありません』などと主人は言つた。

『琴を習はせるといふことは、嫁入前の娘に鍔をするやうなものだ。奥の許を取つたとか何とか言つたつて、弾かずに居れば忘れて了つて、何の役にも立ちはない。それに、子供が出来て、琴など弾いてもゐられやしないからナ』時にはこんなことを言つた。家にちよいちよい来る友達は、塵埃に埋れてゐる琴を見て、『細君はもう琴なんぞ弾きやしないんだらう、君。安く僕に譲つて呉れないか、姪が欲しがつてゐるから』これを聞いた時には、流石に細君も腹を立てた。其晩にはわざわざ琴を出して一人で弾いて居た。

やがて細君は奥から琴を運んで来た。

『これは、ひどい埃！』かう言つて、拂塵を持つて来て、今度縁側の處に持ち出してバタバタとはたいた。

袋を外して、脚をはめて、やがて細君は其前に坐つた。絲はそれでもまだ切れては居なかつた。琴柱を配る度に、二つ二つ高い美しい音を立てた。『絲をかへると、好い音がするんですけれど』かう言ひながら、細君は猶も琴柱を配つて居た。

勝手元の方に子供達の歸つて来た音がしたと思ふと、やがてドヤドヤと女の兒や男の兒が入つて来た。一番末の女の子を抱いた婢は最後にそこから顔を見せた。

『もう少し見てる、今、大變なところだから』

主人は其處からかう聲をかけた。

しかし母親の顔を見た末の女の兒は、手を出したり、體をもがいたりして、母親の方に遣つて来やうとした。婢が強ひてつれて行くと、聲を立て

て泣いた。

子供達はズラリと其處に並んで坐つた。五歳になる女の兒は、これでもめづらしさうに、手を出したさうにして居た。「かあちゃん、これ弾くの？」こんなことを言つて、その傍に寄つて來た。

「かあちゃん今弾いてあげるからね、おとなしく坐つて聞いて居のね！」母親は噛んで含めるやうにして言つて聞かせた。

爪をはめて、いざこれから始めやうとして、主人の方を見て笑つた細君は、「出来るかしら、屹度忘つて了つてよ」其顔には娘の頃の笑が残つて居るのを主人は見た。

それでも琴は流るゝやうな牙えた音を立て、聞かれた。緩かな音と烈しい音とが雜り合つて、一種舊恨に堪へないやうなメロヂイを出して來た。

誰も皆黙つて聞いた。

六段と越後獅子と松づくし、兎に角それだけは満足に弾けた。江の島の曲を望まれて、「何うですか、出来るか何うだか」と言つたが、果してそれは途中で相の手を忘れて、二度も三度も強き直した。

主人は何年にも味つたことのないやうなのんびりした静かな心持になつて居た。辛い、苦しい世の中や、自づからその艱難に向つて突進して行く尖つた心持や、片時も觀察の眼を放たないイライラした氣分や、さうしたものからは、總て全く自由になつて居た。かれは立つて、縁側から下駄を突かけて、裏庭の方へと出て行つた。

居間の明るい灯は、簾を透して、梧桐の葉裏に照つて居た。涼しい風が流るゝやうに袖を吹いた。ふと見ると向ふの家の周囲の大きな樟の樹の輪

廓は、今昇つたばかりの月の明るく空に黒くはつきりと出て見られた。

かれは昔娘をラブした時のやうな気分になつて、庭から裏門へ、裏門から垣に添つた路へと出て行つた。

琴の音は冴えて聞えた。

わざわざ微かな音を聞くために、丘を越えて行つた昔の戀人に、かれはいつかなつて居た。かれの姿は垣の角に見えたり、向うの路の角に見えたりしてゐた。

氣が附くと、家ではまた六段を弾いて居た。静かな夜の空氣に、音は際立つて高く響いた。

裏門に添つた路からは、家の中がいかにも賑かに樂しむらに見えた。六段を弾いたあとは、暫し琴の音が絶えて、子供達の騒ぐ聲が手取るやう

に聞えた。いたづらに弾く音もをりをりはした。

かれは裏庭から家の中に入つて行つた。

『かなり遠くまで聞えるねえ』

『さうですか。何處あたりまで聞えますか？』

『向ふの阪の上からもよく聞える』

『さうですかねえ』細君はかう云つて『本當に絲を取替へさへすると、そりや、好い音がするんですけれど……。何處か此の近所に取換へる處がないかしら？』

『だつて滅多に弾くことなぞありやしないよ』

『三味線の方はとても駄目ですけど、琴の方はお復習をして、いつでも弾けるやうにして置きたい』

『駄目だよ、子供があつちや——』

子供達は琴の傍へ寄つて、糸に觸つて見たり、爪を小さい指にはめて見たりした。總領の女の兒は『かわさん、私に琴を教へて頂戴よ』などと言つた。

猶暫く「君が代」だの「一つとや」だの「香に迷ふ」だのをガチャガチャと弾いて居たが、細君はやがて琴柱を外して、『さア、もう藏入んですよ。子供のおもちやぢやありません』かう言つて、爪やら琴柱やらを箱に入れて、捲つて置いた琴の袋をかぶせて、赤い紐を結んで其處に立てかけた。三味線も立つて長押にかけた。

琴の濟むのを今か今かと待つてゐた婢は、それを見るとそのまますぐ其處に入つて来て、末の女の兒を下におろした。女の兒はよろしく歩行をし

て、いきなり母親の膝に取付いた。

『もう来たのかえ？ 琴もゆつくり弾いてゐられないねえ、お前さんといふものがあつては——』母親はこんなことを言つて、胸をひろげて乳房を出した。

子供達は其處にいろいろなものを持出して来た。西洋きしやごだの、お手玉だの、玩具の蓄音機だの、繪雙紙だの、其他の玩具が雑然として其處に展げられた。兄の方の男の兒は、『おい、清ちやんしやうか』かう言つて、其處に一組の十六むさしを開いた。

『しやう、しやう』

弟の方の兒が親の方を持つた。

父親は餘念なくその勝負を見て居た。弟の持つた親は段々追ひつめられ

て、とうとう雪隠詰にされて了つた。

『よし、それぢやおれが敵を取つてやらう』

父親は子供の前にかへつたやうに、弟の方の兒の代りに今度は子を持つた。『ホ、またやられた。これは中々難かしいもんだな……。昔はよくやつたものだがな……。ホ、さうか、そこに行けば取られるのか』こんなことを言つて、熱心にそれを遣つた。細君も面白さうにして傍からそれを見て居た。『駄目よ、そろ父さんが負けだ！』

『力藏は中々きつい。どれ今一度……。こんどは親を持つぞ』

それでも矢張父親は負けた。『子供の方が上手だ！』かれは楽しさうにして聲を立て、笑つた。

茶を飲んだり菓子を食べたりした。いつもの難かしい父親とは似もつか

ぬほど機嫌の好いのを子供達も不思議にした。

やがて子供は一人去り、二人去りして、段々室はさびしくなつて行つた。

五つになる女の兒は『かわちやんねかして！』と言つてぐづつた。末の兒は膝の上に熟睡してゐたが、『ぢや、私、寝かして來ますから』かう言つて、細君は寝間の蚊帳の中に入つて行つた。

かれは一人其處に横になつて居た。さびしいつらい生活は、やがて森々と隙もなくその周圍に押寄せて來た。今まで楽しく騒いでゐた團樂は、暗いライフに於ける空しい一瞬時のイリエーションのやうに思はれた。さみだれの雲の中でひそかに晴れた一夜、さういふ風にも思はれた。かれが奮闘しなければならぬ對象は到る處にあつた。かれは言ふに言はれない寂寥をひしと胸に覺えた。

げ
ん
げ

朝

かれは立つて書齋に入つて行つた。其處には仕事がかれを待つてゐた。

郊外に住んで居るかれは、辨當を抱へて、電車に乗つて、いつも森の中
にある大きな役所に勤めに行つた。大抵は洋服で、新しい帽子を冠つて、
手にはステッキをついて居た。六疊、八疊、四疊半、二疊の借家住ひで、
出かける時には、子供を生んでもうすつかり色の褪めた細君と二人の子供
とがいつも上り端まで送つて出て来て、「行つて入らつしやいまし」と丁寧
に後から聲を懸けた。

げんげ

毎日五時になると、かれはきまつて役所から歸つて来た。常に父親の靴
の音に聞き馴れてゐる七歳になる總領の女の兒は、五六間先から、そらお

父さんのお歸りと飛んで出て来るのが例になつて居た。其頃には、細君は襦袢がけになつて、勝手に、夕飯の準備に忙しがつて居た。牛肉を煮る匂ひなどがいつも餓え勞れたかれの食慾を刺戟した。

雇ひから段々立身して、今では四十圓ほどの月給取になつて居た。屋賃が六圓、米代が五圓、主人の飲む牛乳が二圓足らず、薪炭、醤油、其他の雑費を合せて七八圓、毎月二十三日頃に月給が下つて、それから來月の十日頃までは、主人の財布にも細君の財布にも一二圓の剩つた金が入つて居て、時にはそれを出し合つて、子供を伴れて、賑かな町の方に出かけて行つた。

かれの扮装はそれでも綺麗にしてあつた。月賦で買った洋服、それをかれは自分で丁寧に刷毛で拂つた。靴も自分で上り端の處にある下駄箱から

出して、クリームをつけて、絹布で拭つた。それに、かれは頭や顔に常に心を用ゐてゐた。道樂と謂つては他にないが、こればかりは他から見ても笑しいと思はれるほどで、髪はきまつた理髮肆で刈り、上等な香水を身分不相應な高い錢を出して買ひ、西洋剃刀を傍に置いて、毎日のやうに顔を剃つた。

ネクタイとカラー、それにもかれは浮身をやつした。流行の色や好みや、さういふものが西洋小間物屋の店頭に並べてゐると、かれはいつも財布を倒にしてそれを買つた。「本當に、それが貴郎の道樂ねえ、まだあのネクタイなど綺麗ぢやありませんか」細君は其まゝに捨て、ゐるネクタイを見て、いつもこんなことを言つた。しかし綺麗な顔や、キチンとした扮装を見るのは氣持が悪くもないと見えて、細君も別に深く咎め立てをしやうと

もしなかつた。それに自分の夫に對する近所での評判もうれしかつた。「好い方ね、好い旦那さまねえ」近所の細君達はかう言つていつも話し合つた。「奥さんとは、うつりがわるいわねえ。旦那さまが可哀相ねえ」「あれで月給さへ餘計に取ると、それこそ大したものですけれどねえ……仕方がないものねえ」こんな話がいつも近所の細君や娘達の口に出つた。

かれの朝に夕に通つて行く電車までの路には、西洋草花の見事に咲いてゐる大きな邸の花園があつたり、春は美しく咲揃ふ櫻の並木があつたり、毛氈を敷いたやうな綺麗な芝草の庭があつたりした。新たに開けた郊外には、新建の家が多く、中には大工がせつせつと家を建て、居る處などもあつた。此方の丘から向うの丘に行く處には、植木屋が角に一軒あつて、其向ふは空地になつて居た。細い川には板橋が架つて居た。

その少し先は町の通りになつて居た。靴屋だの、菓子屋だの、豆腐屋だの、下駄屋だのが續いた。其處等の上さん達は、いつもかれの通つて行くのを見送つた。高いところにある電車の停留所でも、かれの姿はいつも女達の目を惹いた。

かれ等の生活は、平和に穏かに静かに經つて行つた。事といふ事は一つもなかつた。夫婦の間柄も至極圓滿で、子供達も可愛く溫和しかつた。世の中にいろいろな事件や活劇のあるのは不思議に思はれる位であつた。新聞を透して見る種々の悲惨な事件や、恐ろしい罪惡や、思ひもかけない秘密や、さうしたものはかれ等には全く没交渉であつた。平凡を平凡とも思はずにかれ等は暮した。

細君は三番目の子を妊娠して、やがて男の兒を産んだ。それは脾弱な發達の十分でない瘦せた兒であつた。細君はまた細君で、産前に病つた脚氣が治らないので、長い間、醫師にかつた。乳は生れた兒に飲ませられなかつた。止むなく牛乳やミルク罐を買つて哺育した。四十圓取りの安官吏に取つては、これ等の費用は小さい打撃ではなかつた。かれは何うかしてその費用を得なければならなかつた。かれは郷里の先輩が大學の教授をして居るのに頼んで、寫字の口をさがした。かれは幸ひにも國語に就いての素養があつた。更に幸ひにも、その大學の教授は、神田あたりの大きな書肆の依頼を受けて、片手間に國語の大辭典の編纂をして居た。かれは毎週金曜日の夜だけそこに詰めることにして、毎月十圓の手當を貰ふ身となつた。

金曜日には、「今日はお父さんは遅いのねえ」かう言つて子供達は早くから寝た。かれは大學の教授連や助手や書肆の編輯員などの居る洋館の二階で、明るい電燈に照されながら、夜遅くまで一隅に小さくなつて仕事をしていた。十時半が退出時間になつて居るが、仕かけた用事があつたり、教授連が雑談に身を入れて容易に歸らうと言ひ出さなかつたりして、時には十一時を過ぐることもあつた。郊外に歸る電車は、最終が十一時半で、其處から停留場まで十分を要する身には、時計が十一時の處を指すと、もう間に合はないかと氣が氣でなかつた。かれは走つて行つて、辛うじてその赤の電車に間に合つた事も一度や二度ではなかつた。春先や夏は眠くもなつた。それを眠るまいと思つて辛抱するのは大抵な

辛さではなかつた。一日役所の仕事に醒醒した體は、夜まで縛られて、歸ると、つかれ切つて綿のやうになつて居た。

かうして一年ほど経つた。

ある夜のことであつた。かれは十一時過ぎに編輯所の門を出た。其夜も教授連はくだらぬ話に笑ひ興じて居た。郷里の先輩は「君の方は電車が間に合はないと好けないから失敬したまへ」と言つて呉れたが、さうかと言つて先に歸る譯にも行かなかつた。かれは門を出る時、時計を出して入口の電燈に照して見た。もう時間はいくらもなかつた。夏の初めの蒸暑い漆のやうな闇の中を衝いてかれは走つた。

電車はまだ來なかつた。かれは暗い停留場に立つて待つて居た。疲労に伴つて起つて來る欲望がいつものやうに萌して來た。かれは家に寝て待つ

て居る細君を想像した。

轟と音して電車は遣つて來た。赤い電燈は佯しさうにあたりを照して、疲れ切つた車掌の顔をぼんやりと見せた。かれを載せると、電車はすぐ出た。

電車には客が二人乗つて居た。一人は法被を着た勞働者らしい男であつた。一人は二十三四位の、髪を庇髪に結つた、色の白い、何方かと言へば綺麗な女であつた。銘仙の派手な着物を着て居た。

かれは女の前に腰をかけて居た。氣が附くと、かれの眼と女の眼とは、時々宙に會つて居た。女は見ないやうにして、飽かずに男の顔を見た。

電車は全速力を出して走つて居た。勞働者は隅の方に寄りかゝつて目をうつめてゐたが、とある停留場に着くと、慌て、下りて行つて了つた。其

處からは、誰も乗るものはなかつた。

車掌は終日の勞働に勞れ切つたといふやうに、車内に入つて来て、今更で勞働者の居た一隅に腰をかけたが、襲つて来る睡魔に抵抗することが出来ないうやうに、コックリコックリやり始めた。

女は猶頻りにかれの方を見て居たが、俄かに、

『代々木はまだで御座いませうか』

かうかれに向つて訊ねた。やさしい艶のある聲であつた。

『私も代々木で下りますから』

『あら、ま、さうで御座いますか』よろこばしうに、『私はこちらの方は始めてで御座いますものですから。』かう言つて莞爾と笑つて見せた。

女は絶えず笑を顔に湛へて居た。女の眼には、意氣なネクタイと綺麗な

房々した髪とやさしさうな單純な色の白い顔とが映つた。女の顔にも疲れ切つて眠むさうな表情がそれとなく見えて居た。肉附の好い、膝のあたり

の肥へた、好い艶の顔をした女であつた。

停留場をいくつ乗越しても、客は遂に一人も乗らなかつた。かれはかう夜遅く一人で電車に乗つて居る女のことなどは餘り深く考へなかつた。先程言葉を交した後は黙つて只相對して居た。かれは自分の顔の上をりを注がれて来る女の眼の意味を解し得るやうな男でもなかつた。

電車は千駄ヶ谷を通り越して、やがて代々木に着いた。

女も後からつづいて下りた。切符を受取る男は、電燈の明るいテーブルの上に突伏して、グウグウ鼻を立て、居た。

夜は暗かつた。空には星の光もなかつた。間はあらゆる人間の秘密を深

く包みかくして居るやうであつた。停留場から下りる階段には、電燈の餘光が微かに照つて、せんだんの細かい葉の夜風にそよぐのがそれと見えた。下の雜貨店の雨戸はすつかり閉つて、よろづ荒物と書いた軒燈がさびしうに闇に點つて居た。

女は後を追ふやうにして跟いて來た。艶かしい聲は再びかれの耳に入つた。

『代々木に山谷といふ處が御座いませうか』

『え、……私も山谷に行きますから』

『まあ、左様で御座いますか』最初の時の會話と同じやうな調子で女は喜ばしうに言つた。すぐ言葉を續いで、『御迷惑で御座いますけれど、御一緒に願へますまいか』

『よう御座んすとも、……どうせ歸るんですから』

かれは步調を緩くした。女は引添うやうにして、小刻に早く歩いた。靴の音とゴム草履の音とが絡み合つて、静かな夜の空氣に響いた。

女の胸の鼓動の高いのが男にも知れた。かれは成たけ静かに歩いた。角の交番の前を通る時には、巡査は怪しむやうにして二人の方を見た。

『山谷はどちらにお出でいす？』

かれは暫くしてからから尋ねた。

『二百十五番地ださうで御座いますが……中田と申すんですが』

『二百十五番地——中田』かれは考へて、『私の居ます處が百二十番地です

が、……何の邊になりますか……何でも御料地の方でせう』

『本當に遅くなつて、困つて了ふんで御座いますよ』

今通つて居る處は、靴屋だの豆腐屋だののゐる町の通りであつた。大抵はもう戸を閉めて居る中に、一軒電燈がぼつと間に照つて居る家があつた。それは菓子屋で、丸い硝子の櫃やビスケットの大きな籠などが並んで居た。靴屋の角から曲ると、路はさびしく暗くなつた。女はいよいよ男に寄添うやうにして歩いた。微かな夜風が通る度に、紅粉の匂ひや香水の匂ひが男の鼻を撲つた。女は矢張スウスウと呼吸を高くして居た。坂を下りやうとする處で、女は何物に躓いたやうにアツと言つて轉んだ。一步先に行つた男は、『危い！』と思はず言つて引返したが、打伏になつたまゝ、女は容易に起きやうともしないので

『何うかしましたか？』
かう言つて、顔を傍に寄せて見せた。女は呼吸をはづませて居た。

『何うかしましたか？』

かれは覗くやうにして、もう一度かう言つて見た。

『いゝえ、別に……』
「私はあなたを多分してアツと言つた」

女の聲は微かであるやうな聲であつた。かれも流石に胸を躍した。兎に角起してやらうと思つて、女の肩の處に手をやると、女は右の手で、しつかと絡みつくやうに男の體に寄りかゝつた。暖い柔かな血が二人の體を動搖させた。

起き上りざまに、女は男の手を堅く握つた。其時女の 蹠に笑つた顔が間にもそれとあざやかに見えた。……火と水とが俄かに一緒に襲つて來たやうな気がした。二つの黒い影が縫れ合つて、だらだら坂を下へと並んで下りて行つた。水の音が微かに静かにやさしい夜の音楽を奏で、居た。橋

ほんをびすか
らんし!!!
ニんけ
キッスをしげんげ

を渡ると、其處に毛氈を敷いたやうな草場があつた。

『送つて行つて上げやうか』

『いゝえ、大丈夫ですよ』

『でもから遅くつては、訊く人がないと困るでせうから』

『いゝえ、本當に大丈夫よ。』

女はそはそはして居た。男から何か聞かれるのを恐るやうにも見えた。

其處から十間ほど行くと、路は二つに岐れて居た。

『では、私は此方に参りますから』

一刻も早く別れるのを女は望んでゐた。男は新しい靴を重ねたやうに、かう匆卒に別れて行く女を見送つて居た。

『では、左様なら』

『左様なら』

女は足早にスタスタと向ふの方に歩いて行つた。かれは喪心した人のやうに、ぢつと其處に立盡して居た。女の足音も遠くなつて、遂には聞えなくなつて了つた。ふと氣が附くと、かれも家の方へ無意識に歩いて居た。

悪夢に襲はれたやうな氣分で、かれは家の門の戸を明けて入つた。細君は眠むさうな顔をして、ランプを手にして迎へに出て、かれの脱いで上つた靴を下駄箱の中にしまつた。

長火鉢の前に不思議な顔をして、黙つてかれは坐つて居た。細君はいつものやうに、其處で夫の脱いだ洋服を畳みにかゝつた。不意に「何うしたの？ 貴方、大變泥がついてゐるのね。何處かで轉んだんですか』

『うむ』

110

かれは生返事をして『まわ、畳まないで、其處等にかけて置く方が好い』
『さうませう。大變に泥がついてゐる。ほらズボンにも上着にも』細君
はかう言つて、それを衣紋竹にかけた。

其夜はかれは容易に眠られなかつた。二時を聞くまで床の上に輾轉反側
してゐた。

朝、目が覺めると、昨夜のは、あれは夢ではないかと思つた。しかし夢
ではなかつた。洋服が其處に懸つて居た。

かれは起きて、上着やズボンを調べて見た。泥は其處此處について居た。
かれは思ひ出して、不思議な笑みを顔に湛へた。

自分の體か何うかなつて居やしないかとも思はれた。何處の誰だか知れ
ない女……自分の肉は腐れて行きはしないかと言ふやうないやな気分
にもなつた。一方ではまたそれが非常にめづらしくなつた。自己
の今まで夢にも知らなかつた世界が其前に開けたやうな氣もした。二百十
五番地の中田、今朝はまだ屹度其處に居るに違ひない、行つて尋ねて見や
うかとも思つた。別れ際の女の冷淡な態度も、かれには不思議に思はれて
ならなかつた。

いつもの様子と違つて居るので、細君は三度まで、『貴郎何うかなすつて
?』と訊ねた。其度毎に、かれはゾツとした。われとわが身を振返つて見
た。

其女と細君との關係を併せて考へて見たりなどした。今までは、かれ

と細君との間には秘密といふものはなかつた。細君一人を守つて他に女など知らなかつた身には、何だか昨夜のことが非常な罪惡であるやうにも考へられた。かういふ風に、男が細君以外の女に關係を持つといふことは、かれには少くとも一問題として考へなければならぬ事實であつた。別れた路の角から、停留場に至るまでの間は、鮮かにかれの前に現はれて見えた。かれは朝飯をも沈黙の間に済した。やがて出勤の時間が来た。かれは刷毛で洋服を拂つた。ズボンに附着した泥は容易に除れなかつた。朝は美しく晴れて居た。植木屋の松が蒼い空に見事に發えて居た。やがて女に別れた路の角に来て、かれは鳥渡立留つてあたりを見廻した。『まだ其處に居るに相違ない』

かれはこんなことを思つた。

草場には露が朝日にキラキラと光つて居た。夜の秘密が此處に潜まうとは何うして思はれぬやうな明るい日影があたりを照した。川は依然としてさゝやかな音を立て、流れた。

昨夜女の轉んだ跡を探すやうにして、かれは上を見ながら、坂を昇つて行つた。何も落ちては居なかつた。其の箇所も分明とはわからなかつた。

靴の跡もゴム草履の跡もなかつた。

何時も見知り越しの此處等に住んで居る人達は、洋服を着たり、羽織袴をつけたりして、彼方此方の巷路から其姿を現はして、停留場の方へ出て行つた。角の門構の家からは、相變らず綺麗な女學生が紫のメリンスの風呂敷包をかゝへて學校に出かけた。

通りでは、靴屋の亭主はいつものやうにせつせと靴を拵へて居た。交番

の前には巡査が立つて居た。

これが此のまゝで終らうとは、かれには何うしても思はれなかつた。かれは再び逢ふ時を豫期した。

何處かで屹度逢ふに相違ない。愛嬌に富んだ黒い眼、房々した髪、それをかれは常に明らかに眼の前に描き出した。役所の忙しい仕事の中でも、時々それを描いて見た。……ゆくりなく途中で逢ふ、オヤと言つて聲をかける、それから戀人か夫婦のやうにして一緒に歩く、別れてからの話をする、何處かに行く……気が附くと、いつもこんなことを際限なく想像して居た。

代々木にその知つてゐる人の住んで居るといふことが、殊に有力な豫期をかれに與へた。東京の何處かに住んで居る女は、屹度また此處に遣つて

來るに相違ない。林の角、路の角、町の角、垣の角、何處かで再びその笑顔をみるに相違ない。かれはかう思つて毎日その路を通つて役所に出かけた。

金曜日の夜は、殊にさうであつた。電車に乗る時には、屹度、其女がその一隅に腰をかけて、自分の乗つて來るのを待つて居るやうに思はれた。しかし其希望はいつも徒に過ぎて行つた。

二百十五番地の中田といふ家を訪ねて、それとなく其女を消息を探らうと思ひ立つたのは、それから二月ほど経つてからのことであつた。これまでもかれはそれを思はぬではなかつた。時々はそれとなく家を探つて見やうとも思つた。しかし、いつもそれを實行する氣分にはなれなかつた。夕飯を済ましてから、細君には内所で散歩をすると言つて、獨りで出かけ

auf Tre

朝

た。夏はもう暑くなつて居た。浴衣を着た人がぞろ／＼と街頭を通つた。かれは其番地を彼方此方と探した。其處は丁度丘の陰になつて居るやうなところで、要垣やら、芝草の塙やら、冠木門やらが長く續いた。中田……成程其處にその名の記された軒燈の出で居る家がみつた。かなり大きい門構の邸で、裁込の高野槇や、椎や、八つ手や、寒山竹などが外からも見えた。二階には硝子戸がはまつて、藤椅子が置いてあるのが眼に入つた。玄關から入つて、それを訊くやうな心持には容易になれなかつた。かれは其前を行つたり來たりした。最後に、思ひ切つて、かれは門のくぐりを明けた。

鈴の音がけた、ましく鳴つた。書生が出て來た。かれは顔を赧くして、二月ほど前に夜遅く此處をたづ

755
 (27)
 my
 cher

げんげ

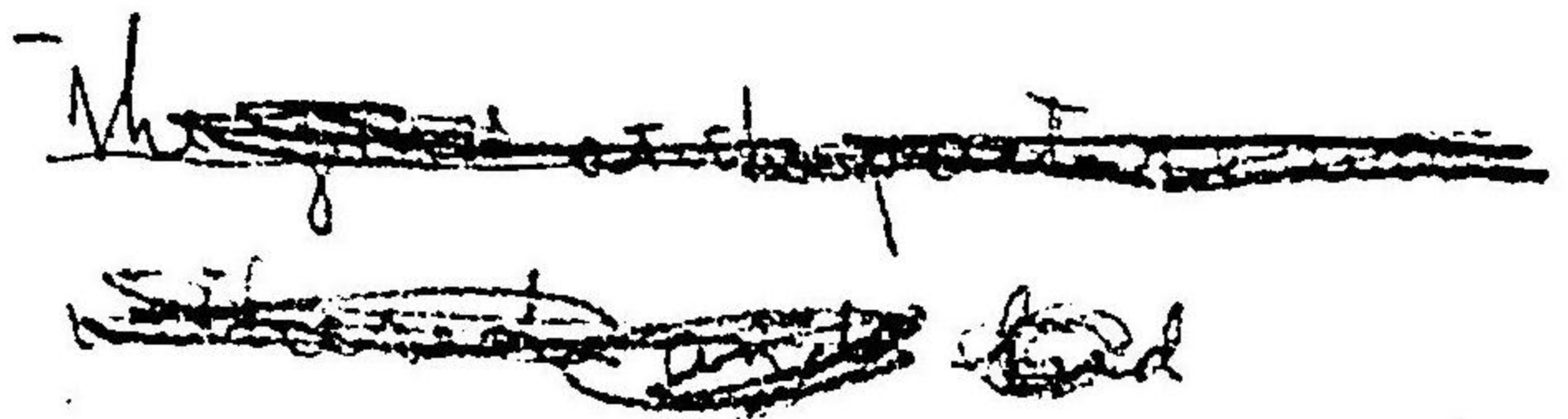
ねて來た女のことを聞いた。『あまりに雲をつかんだやうな話で御座いますけれど』から言つたかれは幾度かどもつた。書生は一度奥に入つて行つたが、暫くして出て來て、『何うも解りませんさうです。……二月ほど前に夜遅く來た女などないさうです。名前でもわかりますと、見當がつかませうけれど……何うも解りかねます』から言つて、怪しい男でもあるやうに、じろじろ／＼とかれの顔を見た。かれは要領を得ずに歸つて來た。

女は果して眞實を言つたか何うか、それもやがては疑問の一つになつた。時は段々經つて行つた。雨の降る日にも、風の吹く日にも、かれは其草場に添つた路を通つて、



Foreign

手紙



Restoration of Myji

朝

三六

停留場の方へと歩いて行つた。かれはもう以前のやうな快活な気分を失つて了つた。かれには世の中が一種の謎のやうに思はれ出して来た。解すべからざる神秘——意味のない神秘が、突如としてかれを襲つて、平和と平凡とに安んじて居たかれの生活を粉微塵に碎いて行つて了つた。

秋はやがて来た。さびしい雨が郊外の大きな柳の林から涙のやうにバラバラとこぼれて落ちた。霧が一面に野をこめて、朝日が灰色に曇つて見えぬ。蟲の音も絶え絶えに、やがては野分か凄じい勢で、野の草を薙ぎ倒した。細君や子供を伴つて賑かな町に出懸けて行くやうなことはもう稀になつて了つた。かれは黙つて物を考へるやうな人になつた。

草場には草が枯れたり萌えたりした。雪が一面に白く埋み盡して居る朝もあつた。春はげんげが綺麗に咲いた。

Cobwebs

紙手

その時分私達の住んで居たのは、畠や林や坂の多い處でした。裏の縁側から見える牛舎の細い煙突の煙と、をり／＼聞ゆる牛の鳴き聲と、朝早く百姓の通つて行く車の音と、あとは霜の白いさびしい野原でした。風の吹く日などは、林が潮のやうに鳴りました。

もうその婢はをりません。何でも人の話に聞くと、田舎に行つて、立派な上さんになつて、子供も一人出来たといふことです。時はいつの間にか経つて行つて了ひます。その婢が效々しく袴がけになつて働いて居たのはまだ昨日のやうに思つてをりますのに……。

その娘は十六の正月に、私達の家に参りました。丁度私が三人目の子供を生んだ時で、産褥から離れてまだ間もない頃だつたと覚えて居ます。何方かと申せば、年よりも小づくりで、何處か子供々々して居りましたが、それでもよく働いて呉れました。子供までの面倒もよく見て呉れました。小さい頃から難儀をした兒で、田舎にゐる頃に、機屋で半年ばかり奉公に行つて居たさうです。何うかすると、その機屋の肥つた旦那が機織女に幾人となき關係をつけて仕方がなかつたなどといふ話を笑ひながらして聞かせるやうな女でした。

林を越して向ふに電信柱が見える。それが私達の買物に出かける田舎町でした。毎朝御用聞きに来るのは、酒屋位のもので、八百屋、魚屋、乾物屋、すべて其處まで出かけて行かなければ用が足りませんでした。毎朝十

時頃黄縞のねんねこで末の兒を負つて、その婢が日の當る林を越して、買物に向ふに出て行くさまが今でも眼に見えるやうな氣が致します。

此婢は名を常と言ひました。

色は少し淺黒う御座いましたが、烏渡可愛い顔をした兒で、「今に大きくなると、別品さんになるよ」などと、宿がよく調戲ひました。いつも黙つて笑つて居ました。小言を言はれても、普通の婢のやうに、膨れた顔をした口答へをしたりしないのは何より私達の氣に入りました。下女と申すものは中々面倒な使ひ難いもので、私達のやうな老人のない若い者同士の家庭では、兎角、主婦の方が押されるやうな形になりたがるもので御座います。が、そのお常は私の家に四年、さうです足かけ五年居りました。

十六から二十まで——女で申せば、少女から娘になる時代です。女に取

つては肝心な時代です。私は其間に本も少しは教へてやりましたし、裁縫も教へてやりました。覺束ない私の知識ですけれど、女の道といふやうなことをいくらか教へてやつた積でした。

五年間には、私達の周囲も變りました。林は切り倒されて貸地になり、畑は地行をされて家屋になりました。鉦の音、鋤の音、朝早く通ると、大工が神纏を着た效々しい姿で焚火を取巻いて元氣よく話しをして居るといふやうな光景の中で私達は日を送りました。時の間に目を睜るやうな大きな二階屋が建つたり、大きな門構をした別荘風の家屋が建つたりしました。洋館なども出来ました。汚い風をした百姓の娘などは其處等に見たくももう見られませんでした。眞黒になつて働いて居た百姓の上さんも、いつか地主の奥さんになつて、綺麗な着物を着て歩いてゐました。

それに、大きな工場が出来ました。高い太い煙突が三本も出来て、其處から黒雲のやうな煤煙が絶えず四邊に靡きました。機械の響、時間毎に鳴る汽笛の音、夜など其の近所を通ると、電燈が晝のやうにかッやいて、何時の間にかこんな賑やかになつたかと思はれる位でした。朝は其處に通ふ男工やら女工やらがぞろぞろ私の家の前を通つて行きました。

私は恐かな生れですから、それと氣がつきませんでした。その周囲の變つたのよりも、私達の生活はもつと烈しい變り方をして行つたので御座います。四人の子持になつた私も、もう以前の私ではありません。四人の子持になつた妻を持つた夫ももう以前の夫ではありません。時といふものは人間からいろ／＼美しいもの清いもの貴いものすぐれたものを奪つて行つて了ひます。

お常ももう段々綺麗になつて行く娘でした。勝手の棚に鏡を立て、絶えず顔を映して見るといふ風でした。下女にしては、身装も綺麗にしてるので、『あれはあすこの内の娘かね』などと言はれたこともあるといふことです。『もうそろそろ嫁に行く口をさがしてやらなければいけない』などと宿でも言ひました。

それに、雇人ですから、さう注意をしてもをりませんが、一年ほど前に、餘りしげしげ近所の若いもの、居る處に遊びに行くのを叱つたことが御座います。『娘ざかりは身を謹しまなければいけない』かうしたことも度々言つて聞かせました。

一度はかういふこともありましたが、夜になると、お常は子供を負つて、屹度出かけて行くのですが、いつもそれが遅く歸つて来るので、つい言葉

を荒くして叱りました。すると、お常は黙つて悲しさをうにして泣いてゐたことがありました。

私は此處に手紙を持つて居ます。これは私に取つて忘れることの出来ない手紙です。いゝえ、手紙の文句ではありません。またその手紙そのものが私に直下に關係したことでありませぬ。けれど、この手紙を讀んで頂かなければ、私達の遣つたことがよく解つてまゐりませぬから、長いつまらぬ手紙ですけれど、一通り讀んで下さい。

— 謹啓粗紙亂筆を以て、弱志爲すなきの小生が御慈悲深き奥様に聊か申上げたき儀有之候、御閑暇の節特別の御慈悲を以て御通覽被下候は、實に大慶の至りに存じ奉り候、戀の奴になり果て候小生、定めし思かなるものよと御さげすみなされ候はんなれど、少しく事の順序を経て、そ

が起りを申上げ候はんに、恥しきことながら、小生は本所縁町に生れ、原籍同區太平町に有之、正木某の長男にして、八歳の時母にわかれ、繼母に事ふること數年、遂に意を決し、放浪の身となりて、義兄に便りて當地に來り、當會社の職工と相成、薄給に甘じて漸く露命をつなぎをるゝめはれなる青年にして、到底お常どの、夫となるべき資格は御座なく、嗚かしの無資無才なる愚子が、大事のお常どのを弄ひ候ふと申しては、定めし御立腹のことと推察致し候、無分別なる青年の所業と御ゆるし下されたく候。

想ひ起し候へば、如月始めの頃にても候ひしか、お常どのを見参らせてより、煩惱の犬追へども去らず、長き月日を一日千秋の思ひに過し、夜に晝にその姿にあてがれ、自休藏王にはわらねども、白菊の花のなまけ

に露の身のちりてもなごかをしからん』わ、當時の小生は實にそれにも劣らぬ思ひ、『愁ひ盡きて身はうつろとなるとも、命の限り戀ひわたるべき』と自から口吟みつ、朝な夕な愁ひに苦しむ候ひし、思ひ中にあるば現るゝものとかや、遂に友人誰彼の知るところとなり、水無月文月の頃なりけん、思のたけを筆に言はせてその女に送れど、返事なきこと幾度、遂に友人の力により、菊月半ばにて候はん、女よりうれしき逢瀬を樂み待つとの返事、當時の小生の喜びはいかばかりにて候ひけん、今思ひ出すも涙の種にて候、それより日を経るに従ひ、二人の情交愈々濃かに、一日半日逢はぬもつらく、をしのふすま連理の契を樂みをり候ひしが、御高恩ある御主人様の御眼を盗むは何よりもの大罪と存じ、二人いろく思案の末、恥しきことながら、御慈愛深き奥様の御袖に縫りて、

二人の命の御助けを乞はんと、繁子様姉上を御願ひ申上げ、奥様まで御伺ひ申上げ候ひしにて候、然るに奥様はことの外打解けたまひ、二人の爲めに御盡力下さるとのこと、坐ろうれしく、皆々打つどひ、來ん春の樂しき話を致し居候ひしに、こはまたいかなることぞ。女心と秋の空とは言へ、噫何たる人面獸心のこの女が所業ぞ、無念、残念、この女には血なきか涙なきか、暫しは茫然と致し候、古今集の「つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまでなげきつるかな」あ、當時の小生はそれよりも、「つれもなき人こそ猶も戀ひしけれ身を思はずば打果してん」と申す方適切に御座候、噫、小生は狂せり、夢に奥様を幾夜か見申候、奥様その女を近く呼ばれて、「一職工の如き男と契りしは恐なり、行末は路頭に迷ふやうになるべし、今暫し待たば良縁を世話せん」と言はれしと見

て夢さめ申候、女の心はそれによりて動き候こと、存候、虚榮の女、憎みても猶餘りある虚榮の女、あ、この女は小生の命なりしを、夫と呼び妻と呼びしことはよも忘るまじ、同穴の契また忘らるべき筈なきに、あゝこの女も幾夜添ひにしわが妻なりしに、淫婦！ 姦婦！ 小生は狂せり、泣けり、怨めり、しかし今は思ひあきらめて候、今は斷然その女を思ひ切るべし、然し戀慕の情は此の身此の世にある中は忘るゝことあるまじく候。

奥様よ、慈愛深き御心を持つて、その可憐なるお常どのを多才多資、將來にも希望ある人に與へてこの世を樂しく暮すやう計らせ給へ、この女小生を見限りしこそ眞に賢く、又、御意見遊ばされし奥様の御賢明は申すまでもなく候、今は何をか怨み申すべき、唯その女の幸福を祈るばかり

りに候、近頃伺ひ候へば、お常どの、御使に町にお出かけの節、遠路お廻りなされし候由、決して決してさやうな御心配これなまやう願上候。小生も男兒にて候へば、誓つてお常どのとは言葉を交すまじく候。行く水に數書くよりもはかなきは

思はぬ人を思ふなりけり

こればかり何十遍となく口吟み暮しをり候

霜月中旬

御慈悲深き御奥様さるる

正次

かういふ長い手紙なのです。其前に常がその大きな會社の職工と懇意になつて、時々路で立話をしてゐるなどといふことは聞いて知つてゐました。またお常の町に使ひに行く時、その會社の傍を通ると、其男ですか何です

か知りませんが、窓から顔を出して見て居るものがあつて、お常は恥しさに顔を赤くしていつも其處を通つて行くといふ話を聞きました。それからその手紙にも書いてある通り、ある日町の墨屋の裏の知つてゐるものからその話があつて、當人同士好いものなら嫁に下さいませんかと言つて來ました。繁子様姉上といふのが其人でせう。鳥渡意氣な小綺麗な人でした。銘仙の羽織などを着てゐました。私は別にそんな深いことは知りませんから、當人さへ承知なら好いでせう位の返事をして置いただけで、別にお常に意見がましいことを言つたことなどはなかつたのです。それは茶話に、『三十錢の日給の職工ではねえ』位なことは言つたかも知れませんが、別にその間を割くなど、いふ心はおりませんでした。その中いつかその話

『いゝえもうあんな處には行きません』唯かう申して居ました。ですから別段そんな深い關係があつたなどとは思ひませんでした。

それに可笑しくもありました。手紙がいかに拙い字で、いかにも紋切形に書いてある。あのお常にもかうした戀人があつたのかと思ふと吹出して笑ひたくなる位でした。『よくしたものだ、年頃になると、あれでも人が大騒をする』かうも思ひました。

それからお常に對しては不思議な氣がしました。その手紙は、男が腹立ち紛に、虚言を書いてよこしたのかとも疑つて見ました。然し何うしても虚言とは思はれません。それに、さう思つて見ると、思ひ當ることが幾らもありました。その以前にも、近所の男にさうした噂を立てられたことがあつた、その時のことも歴々と眼前に映つて來ました。けれどそんなことを思

ふのは厭ですから、私は『まさか、そんなこと』と言つて打消して忘れて了はうとしました。

しかし念の爲め、宿には見せて置く必要があると思ひましたし、お常にその手紙を見せるべきものか何うかといふ疑ひもありましたので、其日、宿の歸つて來るのを待ち受けて、私はすぐ其手紙を見せました。

忘れもしません、それは火燵のある六疊の間でした。電燈が明るくついて居ました。お常は勝手元をすまして、いつもの通り、子供を負つて外に行つて居ました。火燵に當りながら、熱心にその手紙を見て居る周圍では、子供が騒いで遊んでゐました。

『随分面白いことがあるもんですねえ。』

私がかう言つても、

「うむ。」

と言つたきりで、宿は何か考へてゐました。

「お常に見せた方が好いでせうか。」

「見せたツて仕方がない。」

「でも本當でせうか、その手紙は。」

「何うだか解らんね。」

宿はかう言つては、何か考へるやうにして其手紙を繰返して讀んでゐました。

「何か仇をされるやうなことはならせうか。」

宿は返事もしません。

「何か悪戯でもされると困りますねえ。」

宿は始めて気が附いたやうに、「何？悪戯？そんなことは大丈夫だ。」

「ぢや、お常にも黙つて置きませうね。」

「その方が好い……こんなことは言つたツて仕方がない。お常だつて、まりの悪い思ひをするばかりだ。」

で、私はその手紙を深く筆筒の底に藏つたまゝ、何も言はずに、いつか忘れたやうになつてゐました。

私は今此處で少し宿のことをお話ししなければなりません。宿は私達の結婚しない前には非常に堅い基督教信者でした。日曜日には何を置いても教會に行かなければならないやうな人でした。ですから同じ夥伴からも立てられて、「品川さんのやうな信者はない。あの人の感話を聞くと、心から祈禱するやうな氣になる」などと言はれたものでした。それに交際家でもあ

りました。教會に大きな集會などがある時には、屹度司會者に推されました。何方かと申せば快活で、談話好で、洒落を言ふことが上手でした。

私は宿のことをとやかう申すのでは御座いませぬ。私は今でも宿の復活を神に祈つてをります。何うか、元のやうな生活に返して下さい。如何やうな貧窮な暮しでも、いかやうな困難な生活でも、宿の復活さへ叶へて下されば、私は喜んで苦勞も致します。私は毎日かう神を祈つてゐないことはありません。

新聞社に入つたからとて醜い烈しい忙しい生活に入つたからとて、さうした身持にならない人はいくらもあります。堅い神の信仰を失はない人はいくらもあります。新聞社に入ると、何うしても人間がわるくなる、かう人が言ひますが、實際さうでせうか。人は心懸け次第ではないでせうか。

また私は宿の爲めに、子供の多いことを悔むことがあります。子供さへなければ。かう思つて、そんな考を起したことを悔いて、神の前に跪くことも幾度もあります。時といふものが、人間の心を段々粗く硬くして行くといふことも歎かましいことだと思ひます。私は宿が——あの清く正しかつた宿が、何うしてあのやうになつたかと思ふと、ちつとしては居られませぬ。

と申して、それ迄には家庭を亂すやうなことをしたことはありません。何んなに夜が遅くなつても、何んなに酒に酔つても屹度歸つて来るのが例でした。「家庭だけは神聖にする、家庭を亂す奴は馬鹿だ」かう口癖のやうに言つてゐました。けれど外では、中々盛ださうでした。酔つて女を相手に洒落を言つたり唄をうたつたり、それは評判なものださうで御座います。

それに、額を叩くのが酒の上の藝で、それも皆様が御存じなさうです。宿は若い時分から頭が半分禿げて居ました。

宿は『女にかけては天才がある』などと人からも言はれてゐるといふことでした。

その手紙を見てから、一月二月は經つて行きました。私はその事を忘れなやうにしてゐました。お常は常のやうに働いてゐました。毎日子供を賣つて外に行つたり町に買物に行つたりして、別に變つたことも御座いませぬ。冬が来て、霜が白く屋根の上に置くやうになると、郊外の路は靴では歩けないので、お常は毎朝十時頃、宿のお供をして、停車場まで行つて、其處から宿の下駄を持つて歸つて來ることになつてゐました。時間が來ると、

『おゝ、お常まだか。』

かう言つて、宿は勝手の方に行つて聲をかけました。

今では分明と眼の前にはらついて見えるやうな氣が致します。お常はおつくりをしないでは決して出かせませんでした。それに、銘仙の衣物などを着て行きました。紫か何かの矢絣に縮緬と縞子の腹合せの帯などをしめて、何處かのお嬢様のやうな風をして行きました。靴は風呂敷に包んで行くのが例でした。

『子供をつれて行つてお呉れな。』

かう私が申しますと、『奥さん、路が大變なんですよ。』

いつもかう言ひました。

『ぢや、負つて連れてお出！』

昨年まうねんも一昨年いさねんも負おつてよく行いつたのですから、私わたしは別べつに無理むりを言いつたつ
もりでもなく、何なに氣きなく申まをしますと、

『子供こどもが大おほくなつたから、もう負おつてなど行いかれないよ、それや路みちがわる
いんだからな。』

宿やどがから申まをします。

しかし私わたしは別べつにそれそれを不思議ふしぎにはしませんでした。

ところが、何なにうしたことか、ある朝あさ、お常つねが玄關げんくわんのところところに立たつて靴くつを
抱かへて待まちつてゐる。内うちでは私わたしが宿やどの洋服やうふくを手傳てづつて着きせてそれを送やつて玄
關くわんに出でる。宿やどは機嫌きげんの好いい顔かほをして、其處そこに並ならべてゐる下駄げだを穿はいて、い
つものやうにしてステッキスティッキを持もつて出でかけて行く。お常つねも何處どこかニコ／＼
してゐる。やがて敷石しきいしの路みちを並ならんで歩あひて行く二人ふたりの姿すがた、それを見みると、

不思議ふしぎにも私わたしの胸むねは早鐘はやかねを撞ついたやうに烈はげしい鼓動こどうを感じかんじました。

『そんなことがあるものではない。』

から幾度いくたばか理性りせいに訴うたへて見みましても、駄目だめでした。私わたしは其日そのひ一日いちにち立たつた
り居ゐたりしてゐました。

鏡かがみに映うつした私わたしの顔かほには血ちが上のぼつてゐました。

でも私わたしはつとめてそれを素振そぶりに現あらすまいとしてゐました。しつかりした
證據しやうこを握にぎるまでは、荷いかりも自分おのれの夫おとこたる人ひとにさういふ不潔ふけつな疑うたがひをかけては
ならない。かう思おもつてぢつと胸むねを静しづめました。それは随分ずぶん辛いせむい努力どりよくでした。

私わたしはそれから五日間かかんほどぢつと注ちゅう意いして二人ふたりの舉動きんどうを見みてゐるやうな人ひと
でした。何なにが起おこつたか言いふまでもありません。またさうした汚けがれたことを
私わたしの口くちに上のぼせたくはありません。それから續つづいて起おこつた騒動さわどう、宿やどの兄弟きょうだいや

私の父などの耳にまでも入つて、私は辛いく思ひをしました。
その手紙、それを見て黙つて考へた居た男の心、私はそれを考へると、
淺間しい男の心の底を見せられたやうな氣がして、堪らなく厭な氣持にな
ります。お常が何うしてそれを承知したかといふことは、今でも私にはよ
くわかりません。

散
步

『好い天氣ですな』

『本當に散歩には持つて來いですな』

此處まで來る間に、二人は既に幾度となくから繰返した。それほど晴れた好い日であつた。何處かで鶯が好い聲を立て、鳴いてゐた。

一人は丈の高い瘦せた男で、綺麗に分けた濃い黒い髪の下から、色の白い顔と柔しうな眼とが覗くやうに見えて居た。一人はスコッチの背廣を着て、手に藤蔓のステッキを持つてゐた。二人は話しながら歩いた。

二人は今から二時間ほど前、色の白い方の男の家の格子戸を明けて出て

来た。それは崖に添つたやうな細い巷路の中にある家で、其六疊の一間からは、崖の上の大きな門の家の立派な構やう、その庭に咲いて居る梅の花やら、其處から續いて居る崖下のゴタゴタした家屋やうが見えた。洋服姿が入つて行つた時には、主人は縁側の日向に寝轉んで、心持好さうに轉寝をして居た。三毛猫がその傍に丸くなつてゐた。

洋服の男は笑ひながら、肩の處に手をかけて揺ふり起すと、怒いたやうに眼を明いて、そして起立つた。『あゝ……君ですか』かう言つて眼を靡つた。

『奥さんは？』

『今、鳥渡、其處まで行きました。』座蒲團を勧めたり、火鉢の火を掘つたりして、『しかし、もうすぐ歸つて來ます』

二人は瀬戸の丸い火鉢を挟んで、暫らく何か話して居た。二人は同じ役所に出て居た。一緒に算盤を弾いたり簿記をつけたりする連中だ。役所で二人の席は丁度さし向になつてゐて、帳簿や記録が其間に高く積重ねられてゐる。二人はその間から時々紙に書いた俳句の見合せなどをした。

二人は細君の歸るまで話してゐた。細君の丸髭の手絡はまだ紅かつた。

『何うです。行かうぢやありませんか。こんな好い天氣の日曜を、一日家に引込んで居たつてつまらないぢやありませんか』洋服の男はかう言つて、細君の方を見て笑つて、『奥さん、山田君を今日借りて行つても好う御座んすね』

『えゝえゝ、好う御座んすとも』

愛嬌の好い細君は眼元に笑を湛へながら言つた。

で、二人は格子戸を明けて出て来た。「兎に角郊外へ——」かう言つて二人は電車の停留場に來た。

電車と汽車とは時の間に二人を郊外に連れて行つた。それでも汽車の停車場では、一時間ほど待たなければならなかつた。二人は其間に停車場前の西洋料理店の扉を押してその中に入つて行つた。

『先に行つて何か食ふにしても、もう腹が減つて來た。もう十二時ですからな』洋服姿の男は、かう言つて、卓前の椅子に腰を落して、自分の懐中時計の時間を柱の時計の時間に合せた。

银杏返しに結つて赤い襷をかけたボーイ代りの姐さん、時計を見い／＼ノオクやナイフを動かしてゐる田舎者の群、さういふ人達の中で、二人は

牡蠣のフライ一皿とパンとを食つた。紅茶をも一杯づゝ暖つた。洋服姿が勘定をしやうとすると、色の白い方の男も懐中から財布を出した。「まアまア、僕がやるよ』洋服姿はかう言つて強ひてそれを藏はせやうとした。

『ぢや、あとで——』

かう言つて、一人は顔を赧くしながら、財布を元の懐中に入れたが、姐さんと呼んで、敷島を一箇貫つて、先づ一本自分で引出して火をつけて、『何うです、一本やりませんか、煙草を吸はない君でも一本位好いでせう』かう言つてその煙草の袋を洋服の男の前に置いた。

乗つた停車場から下りる停車場まではいくらもなかつた。遠くへ旅行する人達は混雑の中に行きや鞆を持餘してまご／＼してゐた。時の間に汽車は都會から遠かつて行つた。ある停車場では、信號の都合で、汽車が十分

ほど駐つてゐた。洋服姿の男は、其時「此處等に女學生が男とわひびきするやうな處があるさうですわね」と言つて四邊を見廻した。

しかし田と疎な様の木立ばかりで、さうした家が其處等にあらうと思はれなかつた。

瓦葺の上に漲り渡つた都會の煤煙はまだ其處からも見えてゐた。或處は暗く或處は白く或處は黄く見えた。凄しい音をして渡つて行く鐵橋の上からは橋が見えたり、大きな川に添つた町が見えたり、若い人達の櫓を並べて漕いで行くボートの新しい白いペンキが四邊に際立つて見えたりした。

林の中から赤い大きな煉瓦造の建物が見えた。

『さうですか、あれが監獄ですか』

洋服の方に教へられて、色の白い方は、長い間疎な様の木立の間にチ

ラチラするその赤い建物を見詰めてゐた。

すぐ二人の前に居た包みを持つた男は不意に立上つた。「皆さん一寸御披露いたしたいものがあります——」かう言つて、雑誌だの、繪本だの、繪葉書だのを手の指の間に挿んで、節をつけて饒舌り出した。最後に持出した達磨のついたゴム風船とビイビイ鳴る笛とは其處此處で買はれた。

下りた停車場では、二人の行く方に行くらしい人達が多く下りた。二人は此方から彼方に通ずる汽車の橋の上に昇つて行つたが、やがて言ひ合せたやうにぢつと其處に立留つた。晴れた空には遠山の雪がキラキラと日に輝いてゐた。

『何處の山でせう？』

『ムア？』

旅に出たことも無い二人は、その山の何處の山であるかを知らなかつた。
二人は唯あくがれるやうにして見た。

『綺麗ですね』

『何うです、あの雪の光ること！』

から繰返して長い間二人は立つて見て居た。

ある祠堂に通ずる田舎道には、小さい箱のやうな車を人足の押して行く軌道が停車場から十二三町の間通じて居た。汽車から参詣人が下りたと見ると、車掌は塵埃だらけの小屋の中から汚い頑固な不性らしい手を出して切符を賣つた。車庫の中から黄いペンキで塗つた車は一臺二臺とやがて静かに引出されて來た。二人が其處に來た時には、最切の車は、汚い手拭を

冠つた人足に押されて既に出て行く處であつた。

二人は物珍らしさうにしてその次の車に乗つた。『玩具のやうな車ですね』などと二人は話し合つて笑つた。やがて後れた人達も乗つて來た。

此處等あたりの富豪の細君でもあらうと思はれるやうな丸鬚に結つた綺麗な若い細君は、初見らしい丸々と肥つた子を婆やに抱かせて乗つて居た。汽車の中で買つた達磨のついた風船や、虎の兒の玩具などを頻りに子供に見せたり何かして、餘念なくあやして居た。處へ、八歳と五歳位の二人の男の兒をつれた夫婦連が入つて來た。男は役所へでも勤めてゐる人らしく見えた。女は丸鬚に結つて居た。

達磨のついたゴム風船の縮んだり膨れたりするのを末の方の男の兒はぢつと長い間見て居た。と、若い丸鬚の細君は、『さあ、坊ちゃんにも一つ上

「げませうね」かう言つて、もう一つの方の狸のついたゴム風船をその男の
 兒に呉れた。

『まあ、好いのね。何うも御氣の毒さまでした』丸鬚の細君はかう言つて
 禮を述べた。そして亭主の方にそれとなく目配をして見せると、男は信玄
 袋の中から、菓子を入れた袋を出して、そこから桃山を五つほど紙につ
 んで、婆やの抱いてゐる子供の方へ、『さアほんの少しばかりですけど』と
 言つて返禮をした。

若い丸鬚の細君は、顔を赧くじて、禮を言つた。

車を後から押して來る手拭を冠つた人足の顔が飛んだり跳たりするやう
 に車の窓に見えてゐる間、男の兒は頻りにその狸のついたゴム風船を膨ら
 ませてゐたが、やがてパチと音がして破れて了つた。婆の抱いた兒も、虎

の兒の長い尾を引張つて取つて了つてゐた。

祠堂は人車の停留場のすぐ向ふに見えてゐた。門前はかなりに長く、小
 料理屋やくず餅を置く店などが其處に並んでゐた。山門の奥には、立派な
 本堂と、大きな賽銭箱と、鋤口を叩く太い紐とが見えてゐた。

石の手洗鉢の上には、いろ／＼な懸手拭が風に動いてゐた。

二人が禮拜をすまして山門を出て行く時、若い丸鬚の細君は、その手洗
 鉢で洗つた手を手巾で拭いてゐた。

二人の姿は、暫くすると、大きな川の土手の方に行く路に見えた。

『玩具と菓子の交換は面白かつたですね』

『人情が現はれてゐますね』

かう言つて二人は笑つた。

俄かに寒い西風が吹いて来て、黄い埃を高く颯げた。

やがて大きな川に臨んだ料理店の一間に二人は相對して坐つてゐた。
『好い景色ですね』

かう言つて、色の白い方は欄干に凭つて長い間川を見て居た。

川は溶々として流れて居た。對岸には、茅葺屋根が一軒竹藪の中に見えて、渡船小屋の柱に立てかけた張物板の赤い布が、強くくつきりした色彩を四邊に際立たせてゐた。渡船は自轉車一輛とその主らしいハンチングと、頬冠をした百姓とを載せて此方へ此方へと遣つて來た。下流には、風を孕んだ帆が二つ三つ見えて、其向ふに樹木の繁つた高い丘陵が続いてゐた。欄干の下には、生洲船の傍に汚い一艘の舟が繋いであつて、百姓の婆が

んが其處で一生懸命に菜を洗つてゐた。

硝子障子の間から、川を通つて行くものが絶えずチラチラした。二人は時々その方に眼を遣りながら、吩咐けたものゝ出來て來る間を、頻りに五目並べに耽つてゐた。

洋服の方が二度も三度も負けた。

『何うも君は強い』

かう言つて洋服の方は基盤を元の床の間の上に持つて行つた。

一本のビールを二人で飲んで、二人とも眞赤な顔になつて居た。其處に
出て來た赭顔の女中は、『まあ、お二人とも好いお色ね』と言つて笑つた。

ビールを一本飲んでサツサと飯を食つて了ふやうなお客は、女中には相手
にならなかつた。『もう、下げてもよう御座いますか』と言つて、グングン

お膳を下げて行つて了つた。

色の白い方は、膳の上の盃を手に取つて、『一つ記念の爲めに此杯を貰つて行つてやらうかな』かう言つて、笑ひながらそれを袂の中に入れた。

『君はさういふ趣味があるんですか』

『え、かなり集りました』

などと言つた。

膳を引いた後も、二人は暫しそこに坐つてゐた。巻煙草の煙が静かに一
間の中に漂つて行つた。通運丸と書いた白いペンキ塗の汽船が、浅い水を
切つて波を立て、上つて来た。

『何處まで行くんでせうね』

かう言つた和服の方は、その汽船の行く先々の町や港を想像してゐた。

此處から川の下流の停車場に行つて、其處からかへる積りで二人は居た。
しかし料理店を出て、土手の上に来ると、強い西風が凄じく砂塵を揚げて、
そんな興はもう何處かへ吹飛されて了つたやうに思はれた。

『この風では仕方がない』

二人はかう言つて、元の祠堂のある處に引返して来た。

此儘、歸つて了ふのは餘り興がなさ過るといふ話も二人の間に取交され
てゐた。しかしもう此他には此處等には何も見るものもなかつた。山門の
前の長い通をブラブラと人車停車場の方へ歩いて行く二人の姿がやがて見
えた。

停車場には誰も居なかつた。車もなかつた。近所での話では、客が向う

にあつて車が来なければ何時まで待てゐても駄目だと言ふことであつた。

二人は止むなく別な道を別な停車場の方へ行つた。

都會の市場に朝毎に運んで行く野菜の準備を百姓達にして居るやうな野道を二人は静かに歩いて行つた。深く畦を切つて作つた葱、それを抜いて、束ねて、路傍の車に積んで居るやうな光景は到る處にあつた。畑にゐる若い娘達は仕事の手をとめて、都會の人の後姿を見送つてゐた。

「女の子に振返られると思つたら、君がゐるからですね。」

「さういふ譯でもないでせう」

かう色の白い方はおとなしく言つて笑つた。

二人は俳句の話をしてゐた。「向うに行くまで何か一つ遣らうぢやありませんか」洋服の方はかう言つて勧めた。二人は俳句を考へながら歩いた。

二人は肥料溜の臭いのを吸んだり、葱の白根の長いのを吸んだりした。遠く離れた野中の百姓家なども二人の俳句の題材になつた。

『えらい天気になりましたね』

色の白い方がふと氣が附いたやうに言つた。洋服の方の一人も前からそれを知らぬでもなかつた。西から南、都會の空にかけて、凄じい黒雲が烈しい風と共に一面に押寄せて來てゐた。それに、都會の場末の工場の煤煙が夥しく交つて靡いてゐるので、丁度非常に大きな火事でも起つたかのやうに見えた。

『雨が降つて來ては大變ですね』

『こんな空にならうとは思ひがけませんでしたね。少し急ぎませう』
かう言つた二人は急ぎ出した。俳句などはもう考へてゐなかつた。

黒い雲を絶えず氣にしながら歩いて行つた間には、國道との岐れ路の石標が立つてゐたり、昔、榮えて今は全く衰へ果てた驛が展けられてゐたりした。

驛と驛との間の川には、橋板の朽ちた古い長い橋が架つてゐた。橋を渡る小屋が橋の袂にあつた。やがて雨がポツポツ落ちて來た。二人は丁度その時橋の上を幅をして通つて行く大きな松の樹を載せた大八車の前に出やう出やうとしてゐた。

橋を渡つて、その車の先に出ると、二人は一生懸命に駆け出した。

洋服姿の後から髪の濃い色の白い男がセイ／＼呼吸を切らしながら駆け行くさまが、ポツポツ大きな粒の雨の落ちて來る街道の中に暫し鮮やかに見えてゐた。

森の陰の停車場に行つて、二人はホツと呼吸を吐いた。

洋服姿の男は停車場の中から暫し凄じい南の空を見てゐたが、「本當に戦争のやうだ。奉天の陥る時は丁度あゝいふ鹽梅でしてたよ。思ひ出すなア」かう言つて猶ぢつと見詰めてゐた。

『それは面白いね、君にもさういふ時代があつたんですか』

洋服の方は笑ひながら言つた。二人は停車場からゐる町の通に出やうとしてゐた。一しきり押寄せて來た黒雲は僅かな雨を降したばかりで、逸早く通つて行つて了つた。夕日は花やかに射した。

色の白い方は、『あの頃はすぐ、夢中になつて了ふんですからな』かう言つて、其處にある大きな牛肉屋を指して、『其時分は、よく、その牛屋で飯

を食つて歸つたもんです』

『今でもその家はあるんですか』

『家はありますが、代も變り名も變つて居ます。雨の日に傘のない時など、此處を大急ぎで走つて停車場に行つたもんですが』

かれは歩きながら其時分のことを話した。年は二十四、日曜日には乾度通つて來た。上野の山下から車賃が十五錢で、いつもそれに乗つては遣つて來た。一年ほど其の關係がついてゐた。相手は十九位で名は葛城——こんな話をかれは歩きながら洋服の男にして聞かせた。

『醫者に請出された筈だが、今は何うしましたかネ』

かういふ話も平氣でした。

橋を渡つて都會から出て來たやうなその大通は、此處等あたりでも、ま

だ相應な賑さを保つてゐた。大きな構の家屋があると思ふと、それは多くはさうした種類の家であつた。淺黄の暖簾が風に靡いてゐた。色の白い方の通つて來た家は、此土地では一番大きな名高い舖であつた。其處は今でも前に柳の樹が植ゑてあつた。かれは二階を指して『丁度、あの室でしたよ。久しく來ないが、まだ元のまゝだ』かう言つてなつかしうに其方を見た。

『此方が張見世をする所だつたんです』

隣の塀で圍んであるところをかれは指して見せた。

『それでも、初めは、夜來たもんですけれど、後には日曜日の十時頃から來て、日の暮れる時分まで遊んで行つて、これから客が來やうといふ頃、暖簾を分けて、そつと出て來たもんです。其時分、もう、私は雇に出てま

したからね——』

『矢張忘れられなかつたでせうね』

『いや、そんなでもなかつたですよ。葛城といふ方の女は、それでもやさしい女だつたですけれど、それが引かされてから、その妹女郎を買つたんです、段々金をまさあげられることがつまらなくなつて、遂には喧嘩して別れて了つたですよ……だから、そんなに辛くはなかつた』

『兎に角面白いね、奥さん知つてゐるんですか』

『え、え、來ると間もなく、日記を見られちやつて……先生が來る少し前でしたからね。日記になど書かなけりや好いのに、矢張書きたかつたんですね』

かれは笑ひながら言つた。

賑かな通は長く續いた。かれはいろいろなことを知つてゐた、角の小間物屋に綺麗な娘のあつたことや、青物市場の朝の賑かなことや、荒川堤に行く近道や、さうしたことをかれは行く／＼洋服の男に話した。夕暮の静かな青物市場では、一人の男が何か見世物を出して、その周圍に黒山のやうに人を集めてゐた。

『すゞめ焼を土産に買つて行つて、それで遊ぶことを悟られたことがありましたよ』

鮎のすゞめ焼を賣てゐる店の前では、思ひついたやうにかれはこんなことを言つて聞かせた。

二三年の出水に水脈が二つに別れて、以前は、女や婆さんが足袋の古着だのを地べたに並べて賣つてゐた處に、新しい橋が出来た。水がちよろ

ちよる流れてゐた。

大橋を渡る頃には、二人はもうかなり疲れてゐた。それに夕暮ももう近く、眼の前に迫つてゐた。橋の袂にかゝつてゐるペンキ塗の汽船、流れ寄つたやうに岸に集つてゐる筏、向ふ岸の材木屋の材木置場——それが花やかな夕日に照されて、丁度油絵か何ぞのやうに見えた。ボートや小舟がその間を織るやうに動いて居た。

『何處かに行つちやつたと見える』

かう言つて失望した土地に名高い鮫を賣る店が向う側に新築して移つて居たのをやがて二人は發見した。『まだ、そんなに腹が空ないけれど——』二人はかう言ひながら其の鮫屋の店に入つて行つた。それは藥種商を本業にしてゐるやうな家で、店には大きな新しい卓が

置いてあつて、二つ並べた菰被を後に、頭の禿げた爺が赤い顔をして立つてゐた。

『鮫はもうお了ひでナ——』

しかし二人は其儘其處を去らうとしなかつた。『少し休ませて貰はう』から言つて、椅子に腰をかけて巻煙草に火を點けた。店の火鉢の傍には、近所の人らしい品の好い爺さんが、これさへあればと言はぬばかりに、ちびり／＼一人で徳利の酒を傾けてゐた。

二人は其處で酒を一合飲んで赤い顔をして戸外に出た。

路は二つに岐れてゐた。

瓦斯や電燈はもう點いてゐた。『何うします、電車で歸りますか。それと

も根岸の方に歩いて行きますか』

『電車で帰りませう』

洋服の男はかう言つて先に立つた。

二人は樂みにした日曜のからして過ぎて行くのを侘しく思つた。明日からは、また例の計算、例の簿記、例の暗い一間、例の係長の難かしい顔……二人は黙つてつまらなさうにして歩いた。

電車の停留してゐる處に来て、

『ぢや、電車で帰りませうか』

『帰りませう』

かう言ひながら、二人はある物足りない心持を同じやうに感じた。此ま歸るのがいかにもつまらないやうな侘しいやうな氣がした。二人の行く

先には賑やかな吉原の狭斜があつた。『何うせ近くに來たんだから、それぢやひやかすだけひやかして行きませうか』

かう洋服の男が言つた。

二人は電車に乗らずに歩き出した。元氣が俄に出て來た。兩側の灯が明るくなつたやうにさへ思はれた。二人は賑かな明るい巷路を曲つた。

『蕎麥でも食つて行きませうか』

『さうですなえ、腹が減りましたねえ』

その蕎麥屋で、二人はまた酒を一本つけさせて飲んだ。饑ゑが満たされると、疲勞もいつかなくなつたやうになつた。蕎麥屋を出た時には、蘇つたやうな好い氣分に二人はなつて居た。

灯が町から町へとかがやいてゐた。やがて出て行つた土手の上には、お

でん爛酒だの、屋臺だの、小料理屋だの、いろ／＼なものがゴチャゴチャと並んでゐた。その混雑の中を、懸聲の好い車は、縫ふやうにして馴けて行つた。

二人の姿はやがて大門の方へと歩いて行つた。二人は肩を合せるやうにしてゐた。大火から一年経つた今では、もう本音請の出来た家もかなりに多かつた。電燈と瓦斯とは晝のやうにこの賑かな廓を照してゐた。

張見世に並んだ女の色彩は、二人の眼の前を絶えずチラチラした。狭い巷路を通る時には、客を呼ぶ艶かしい女の聲が四邊に際立つて高く聞えた。二人は、とある暗い角のところ立つて、懐中にある金を合せて見た。

飯

一人は庖丁を磨ぐ、一人は水を汲む、一人は徴發して来た鶏を料理する。夕日をまともに受けた支那家屋の前には、釜から上る煙が薄く靡いて、物の衰る臭が、餓ゑた一行の食欲を強く刺戟した。

『杉山君がかうして居る處を東京の奴等に見せたいものだねえ』

脊の高い有名な畫家は、こんなことを言つて飯を焚いて居る肥つた男の後に立つた。

飯
『まア、戦地でもなくつては見たくつても見られない圖だねえ』今一人の瘦せた男は、せつせと土間を掃いて居たが、かう言つて笑つて鬮子を合せ

た。

肥つた男は、黙つて傍にゐる高梁殻を折つてはくべ、折つてはくべた。くべる度に黒い煙は竈から簇々と揚つた。この土地では何處の民家でも、竈が入口の扉の傍につくりつけになつて居て、平扁い大きな釜が其上にかけてあつた。それは豚の脂とにんにくの臭で鼻持のならないほど汚なくなつて居る釜であつた。しかし炊事の飯よりは旨いと言つて、一行は到る處で、ゴシゴシとその釜を洗つて飯を煮いて食つた。

今日も暑い路を九里ほど歩いて來た。昨日戦争があつてのこの急行進には、誰も閉口しないものはなかつた。軍司令部たるものが、こんなに盲進して好いものだらうかななどの懸念も出た。着いた村には、入口に涼しいこんもりとした楊樹の陰があつて、宿舍のさまる間、其處に軍司令官を始

め、參謀の將校達の肩章やら飾紐やらが繪のやうに明かに見えて居た。あゝる若い佐官と尉官とは、地圖を草の上にひろげて、何か頻りに話し合つて居た。

此村は餘り悪い方ではなかつた。土塀を廣く取廻した大きな家屋もあつた。それに山の近いのと樹の影の多いのとは殊に人々に鮮かな涼しい感を與へた。一行は堂舎係の曹長に教へられて、疲れた足を引摺るやうにして、一時間ほど前に其宿舍に遣つて來た。

釜からは湯氣がプブウ吹いた。肥つた男は一二度蓋を細目に明けて見たが、もう好いと思つたか、急いで竈の下火を引き始めた。外では鶏の料理がすつかり出來上つて、瓦を合せて拵へた小さい間に合はせの竈に、アルミニウム製の鍋がグラグラ煮立つて居た。丁度梅の生えた男が鹽梅

を見やうとして、金梳を腰から取つて、それを鍋の中に入れて、少し酌み取つた汗をふうふう吹いて啜らうとして居ると、俄に

「敵襲！」

と鋭い聲が聞えた。

「敵襲！ 敵襲！」

續いて二聲三聲聞えた。

バタバタと前の通を駆けて行く足音が續いてした。

一行はハツとした。誰も皆な眼を睜つた。戸内から一番先に出て来た家の驚いた顔に夕日が照つた。誰も皆な黙つて耳を傾けた。

野はしんとして居た。

暫くはその眞偽を確かめることも出来なかつた。

「敵襲！」

何處かで又叫ぶ聲がした。

此時、戸外に出て居た一行の一人が、恐怖に満ちた蒼い顔をして、飛んで入つて来た。

「何うした？」

異口同音に皆問うた。

「敵襲だ！……よくは解らんけれど、敵の騎兵が三箇中隊ばかり遣つて来たんださうだ。司令部には兵が居ないんだ。大騒だ」

「しかし、軍の援護隊がある筈だ」

誰かがかう言つた。

こんなことがありはしないかと思ひながら今日歩いて来たことを誰も考